國文

新制第一版

巻六

375.9
Fu26
資料室

41789
教科書文庫
24
810
41-1931
200030
2010

資料室

文部省檢定濟

昭和六年十月二十日　中學校國語漢文科用

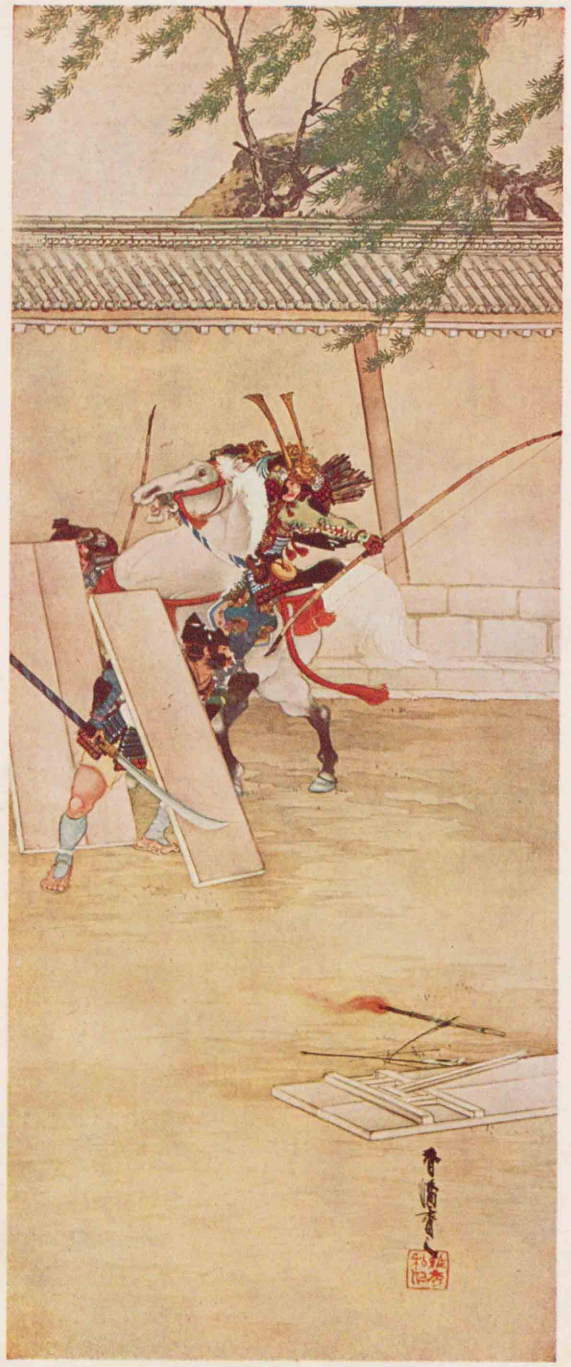
375.9
Fu26

冨山房編輯部編

國文

新制第一版

東京冨山房神田



爲朝奮戰　谷口香嶠筆

廣島大學圖書之印

廣島大學教
47793
藏書

國文　卷六　目次

一　みやびの物語……一
　一　關の秋風……（古今著聞集）…一
　二　秋の青柳……（古今著聞集）…二
　三　上手の心……藤原信實…四
二　月の名所……谷口梨花…六
三　空行く雁……（異本曾我物語）…一一
四　秋風（古俳句）……一四
　俳句評釋（自修文）……沼波瓊音…一七
五　東大寺……薄田泣菫…二五
六　鎭西八郎……（保元物語）…二八

七　夜叉王……岡本綺堂…三五
八　鈍と根……永井潛…四七
九　賴朝と義經……（義經記）…五二
　　美濃路を行きて（自修文）……田山花袋…五六
一〇　舊都の月……（源平盛衰記）…六五
一一　松の下露……（太平記）…六九
一二　深草の里（古歌）……七五
一三　丈夫の襟度……大町桂月…七七
一四　山陰の麒麟兒……八一
　　清正公と紀文大盡（自修文）……幸田露伴…九二
一五　最後の參內……（太平記）…九九
一六　樹の根……和辻哲郎…一〇三
一七　明倫歌集より（古歌）……一〇八
一八　やまと歌……（古今著聞集）…一一〇
一九　人臣の道……北畠親房…一一三
二〇　我が國體と萬世一系の信條……黑板勝美…一一六
　　君民一家（自修文）……深作安文…一二五
二一　春の樂しみ……貝原益軒…一二九
二二　縮むものに彈力あり……相馬御風…一三六
二三　建國讃歌（詩）……西條八十…一四四
　　臺灣より（自修文）……一四六
二四　ものゝ上手……富士谷御杖…一五四
二五　鶯……永井荷風…一五六
二六　那須の與一の事……（平家物語）…一六五
二七　仁は心のいのち……室鳩巢…一七〇
二八　毀譽……三浦梅園…一七六

南象學圖書之印

國文卷六

一　みやびの物語

一　關の秋風

(一)能因入道、(二)伊豫守實綱に伴なひて、かの國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎淺からざるに、神は和歌にめでさせ給ふものなり、試に詠みて三島に奉るべき(三)由を、國司頻りに勸めければ、(四)あまの川苗代水にせきくだせ

あまくだります神ならば神。

と詠めるを、みてぐらに書きて、神司(かんづかさ)して申し上げたりければ、炎旱の天俄に曇りわたりて、大きなる雨ふりて、枯れたる稻葉おしなべて綠にかへりけり。忽ちに天災を和ぐる事、唐の(五)貞觀の帝の、いなむ

(一)平安時代の歌僧。俗名橘永愛。生歿年不詳。
(二)日野資成の子。姓は藤原。名は金葉集及び大日本史にはある。
(三)愛媛縣越智郡大三島宮浦なる三島神社。一名大山積神社。國幣中社。
(四)金葉集卷十雜部下に見える。
(五)唐の太宗皇帝。いなごを呑んだ事は貞觀政要に出てゐる。

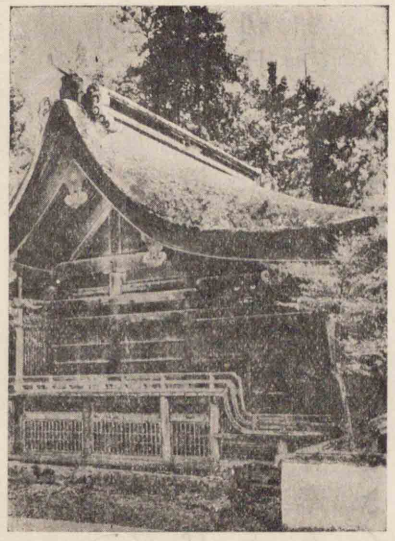
しを呑めりける故事にも劣らざりけり。

この入道は至れるすきものにてありければ、

都(一)をば霞とともにたちしかど
あきかぜぞふく白川のせき。

と詠めるを、都にありながらこの歌を出さん事念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、色を黒く日にあたりなして後、陸奥國の方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しはべりける。

―古今著聞集―



伊豫三島神社

二　秋の青柳

花園左大臣(二)家に始めて参りたりける侍の、名簿のはしがきに、「能は歌よみ。」と書きたりけり。おとゞ秋の初南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、「下格子に人参れ。」と仰せられけるに、「藏人五位たがひて、人も候はず。」と申して、この侍参りたるに、「たゞさらば汝おろせ。」と仰せられければ参りたるに、「汝は歌よみな。」とありければ、畏まりて、御格子おろしさして候に、「このはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ。」と仰せられければ、「青柳の。」と初の句を申し出したるを、さぶらひける女房たち、をりに合はずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、「ものを聞果てずして笑ふ様やある。」と仰せられて、「とくつかうまつれ。」とありければ、

青柳のみどりの絲をくりおきて
なつへて秋ははたおりぞ鳴く。

と詠みたりければ、おとゞ感じ給ひて、萩おりたる御直垂おし出して、賜はせけり。

(一)後拾遺集第九羇旅の部に見える。

(二)源有仁。第七十二代白河天皇の御孫。詩歌管絃を善くした。久安三年(一八〇七年)歿、年四十五。

(一)第五十九代宇多天皇の時の年號。(一五四九―一五五七年)
(二)平安時代の歌人。姓は紀貫之の甥。古今集撰者の一人。延喜五年(一五六五年)歿、年六十三。
(三)古今集卷四秋の部に見える。
(四)鎌倉時代の歌人、畫家。文永二年(一九二五年)歿、年八十九。
(五)鎌倉時代の歌人。新古今集撰者の一人。仁治二年(一九〇一年)歿、年八十。
(六)藤原良經。

(一)寛平の歌合に、初雁を友則、(二)

(三)はる霞かすみていにし雁がねは
今ぞなくなる秋霧のうへに。

と詠める。左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人こゑ〳〵に笑ひけり。さて次の句に、「かすみていにし。」と言ひけるにこそ、音もせずなりにけれ。同じ事にや。

―古今著聞集―

三　上手の心

(四)藤原信實

近頃和歌の道殊にもてなされしかば、「內裏、仙洞、攝家」孰れもとりどりに底を究めさせ給へり。臣下許多聞えし中に、(五)民部卿定家、宮內卿家隆とて家の風絶ゆる事なく、その道に名を得たりし人々なりしかば、この二人には孰れも及ばざりけるに、或時攝政殿、宮內卿を召して、「當時正しき歌人多く聞ゆる中に、孰れか勝れ侍る。心に思ふ樣、ありのまゝに。」と御尋ありければ、「孰れともわき難く候。」とばかり

(一)新敕撰集卷五秋の部下に見える。
(二)新敕撰集卷六冬の部に見える。

棧橋

申して、思ふ樣ありげなるを、いかに〳〵、とあながちに問はせ給ひければ、懷より(一)畳紙を落して、やがて出でにけり。御覽ぜられければ、

明けばまた秋の半ばも過ぎぬべし
かたむく月のをしきのみかは。

と書きたり。この歌は民部卿の歌なり。かゝる御尋あるべしとはいかでか知るべき。唯もとより面白く覺えて書きつけて持たれける なめり。

その後また民部卿を召して、さきの樣に尋ねらるゝに、これも申しやる方なくて、

(二)かさゝぎの渡すやいづこ夕霜の
くもゐに白き峰のかけ橋。

と高やかに詠めて出でぬ。これは宮內卿の歌なりけり。忠實の上手の心はされば一つなりけるにや。

―今物語―

(一)鐵道省運輸局囑託。名は滿雄。熊本縣の人。明治七年生。

證左

心の琴線

二　月の名所

谷口梨花(一)

我々日本人は特に月を愛し、月影の明暗によつてあやなす夜の風景美を觀賞する。月を背景とした名所、月の美を歌つた歌や詩の多いのが、その證左である。

見るまゝに清く靜けくうるはしく
はては悲しき峰のへの月。

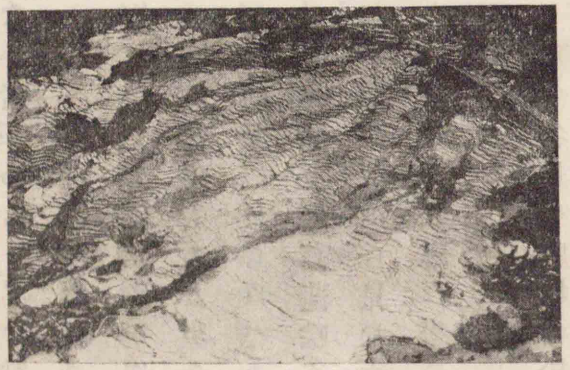
これは佐々木信綱氏の富士山上での感懷であるが、八合目の岩室に泊つて、明月に對して慄へながら一時間餘りも屋外に佇立した事のある私に取つては、山の月を詠んだ歌で、この歌程心の琴線に觸れるものはない。「はては悲しき……。」全く月に對してゐるうちに、何といふ事なしに、止めあへぬ涙を落した。

名月や江戸の奴等が何知つて。

(一)長野縣更科郡。

(二)同縣埴科郡坂城村にある。

これは一茶のお國自慢で、信州の更科(一)のいはゆる田毎の月を詠じたものである。棚田の田毎に映る月影も無論好いには相違ないが、鏡臺山(二)を前影として、千曲川流域一帶を月明に見はるかしたその眺觀美が、更科の月の生命である。興津の清見寺が觀月の勝區と言はれるのも、三保の松原の沙洲が長く〳〵海中に浮んだ景觀があつて景色を整へてゐるからで、伊勢の朝熊山から月明の夜伊勢灣を見下した景情が印象づけられてゐるのも、やはりその眺觀美に引きつけられた結果である。



飛行機から見た更科の棚田

みづうみ見えてすめる月影。
玉くしげ箱根の山の峰深く

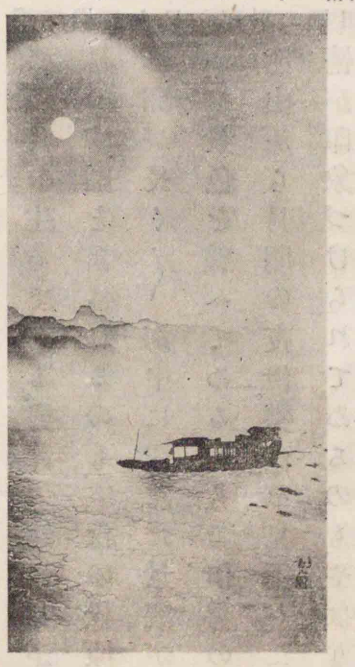
(一)鎌倉時代の歌僧。定家の孫、爲家の長子。比叡山に入つて、律師となつた。
(二)秋田縣仙北郡。
(三)田澤湖の西南岸。湖の神を祀つてある神社。
(四)茨城縣（常陸國）行方郡。
(五)高井氏。蕪村の高弟。京都の人。寛政元年（二四九）歿、年四十九。

靜寂な湖の面を照す月影。(一)慶融でなくても、誰かその美に打たれない者があらう。私は嘗ては十和田の月明に舟を湖上に進めた事もあり、(二)田澤湖の靜けさを櫓の音に破つて、(三)漢槎宮のほとりから月影に黑く聳えた駒ケ嶽を仰いだ事もあるが、今だに印象づけられてゐる。霞ケ浦では菖蒲咲く潮來(四)稻荷山から見た水郷の月、これも忘れ得ぬものである。

名月や唐崎の松瀨田の橋。　几董(五)

月明の琵琶湖の周遊、曉を恨む人が多からうと思ふ。

總じて月は靜寂の表象である爲か、海よりも湖にふさはしく感



江上の月（下村觀山筆）

(一)圖司氏。羽後の人。蕉門の俳人。元祿九年（一六九六）歿した。
(二)廣島縣（備後國）沼隈郡。瀨戸內海の海驛として古來名高い。
(三)鞆の東方。鞆と仙醉島との間にある。
(四)佐賀縣東松浦郡。
(五)久村氏。江戸時代末期の俳人。名古屋の人。寛政四年（一七九二）歿、年六十一。

じられるが、海ならば入海の小波寄せる濱邊が好い。

松島のものとゝのひしけふの月。　呂丸(一)

靜かな波の上に浮ぶ千松(ち)島を照す明月。全く景情一致の趣が現れる。

汽車の窓にさしこむ須磨の月夜かな。

靜かな海。その海に浮んだ淡路島の眉なす姿。その空から美しい月が汽車の窓にさし入る。何とも言へぬ風情ではないか。かうした所では、瀨戸內海の鞆(二)に遊んで辨天島(三)まで行つた事や、九州は唐津の虹(四)の濱邊に月と共に夜をふかした事が、思出の種となる。

月ひとり荒海をすゝむ今宵かな。　曉臺(五)

日本海の荒波に舟の影が絕えて、月ひとり中天を行く光景はもの凄い感じがするが、自分が新潟から佐渡へ渡つたのは二百十日前後で、內心多少不安に思つたのを裏切つて、海は疊の樣に平かで

(一)新潟縣（佐渡國）佐渡郡。夷灣に臨む。

(二)京都市の西方。大堰川の支流。歌枕として知られて居る。

(三)十津川の支流。奈良縣吉野郡北山郷から發し、南西流して十津川に入る。

(四)北山川が紀伊の國境を奔下するあたりの幽溪。

あつた。さうして汽船が夷(一)の港に入る頃には、月の光が美しく海を照した。波の荒い玄海灘を經て博多の港にはいつたのは、もう二十幾年前の事であるが、これも靜かな波の上の月を仰いだ事を覺えてゐる。唯青森から函館へ夜航便で渡つた時には、津輕海峽の荒れに出會つて、可なり恨めしい月の光を仰いだ。

いはばしる水の白玉かずかずに見えて
清瀧川(二)に澄める月かな。

これは藤原俊成の作であるが、清流に澄む月影も人の心を捉へる。湖、海、川。月はその美しい影を水に映す事によつて、更にその美觀を發揮する。嵐峽の大堰川の船遊、笠置の木津川の船遊山、何れも忘れられないが、北山川(三)を遡つて瀞(四)八丁の靜寂境に舟を入れたひと年、旅館瀞亭の二階の欄干にもたれて、をりから三日四日頃の弦月が、靜かな〳〵あの瀞の深淵を照してゐた情景は、殊に印象的の者で、今だに彷彿として眼前に現れる。

—旅行禮讃—

(一)一八四一年。

(二)兄曾我十郎祐成の幼名。

(三)弟曾我五郎時致の幼名。

(四)夫祐泰の死後祐信に再嫁した。

(五)祐信。

(六)祐經。

三　空行く雁

頃は人皇第八十一代安德天皇の養(一)和元年、あらたまの年立返りて一(二)萬は九つ、箱王(三)は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに母御前(ごぜ)、父はいづくにおはしますぞや。誠やらん、父の御事は佛になつてましますとや。その佛はいづくにましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前いざさせ給へ。」と言ひければ、遙かに忘れたる來し方も、今更思ひ出されて、消入るばかりなり。(四)母泣く〳〵宣ひけるは、「あの曾我殿(五)こそ己等が父にてあれ。」と心强く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらん狩場より歸り給ふ途にて、工藤一藤(六)とやらんに射られて死に給ひぬと、兄御前は語らせ

給ふぞや。當時鎌倉殿(一)の切者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等がこの里(二)にあるを知らでや過ぐらん。」など大人しく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたるかりがねの、南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ箱王殿。空を飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたるは、一つは父、一つは母、三つは子供にてぞあるらん。ものいはぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、わ殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿(三)と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓、矢をも持ちて、今ぞ思ふ樣に物を射ありきなん。我等より幼き者にても、馬、

(一)源頼朝。
(二)神奈川縣(相模國)足柄下郡曾我中村。
かりがね
人倫
(三)三郎祐泰。

小賢し

鞍、弓、矢をもて物を射ありく事の羨ましさよ。これ等の事ども思ひ續くれば、何時もよりも今宵は父御前のこひしくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟も小賢しく顔を合せて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかにわ上臈たち、夜も更けぬるに、さ樣にはおはするぞ。疾く〳〵入らせ給へ。」と恐しげに言ひければ、二人の者は門外に逃出でて、思ふ樣に飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

曾我兄弟（飛田周山筆）

その後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世に亡き父を

慕ひつゝ、語り合するまではなけれども、唯目ばかりを見合せて、互に袖をぞぬらしける。或時兄弟は、竹の小弓に薄はぎの小矢を取添へて、遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬、箱王に申しけるは、「我等も何時か成長して、わ殿は十三、我は十五にだにもならば、いかなる野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く差合ひ射取りて後には、ともかくもなりなん。わ殿も弓をよく射習ひ給へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ。」と言ひければ、弟もうちうなづきけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。

——異本曾我物語——

年ばへ

(一)服部氏。淡路の人。蕉門十哲の一。寶永四年(一三六七)歿、年五十四。

四　秋風

1 秋風のこゝろ動きぬなはすだれ。　嵐雪(一)

2 あか〳〵と日はつれなくも秋の風。　芭蕉

3 山は暮れて野はたそがれのすゝきかな。　蕪村(一)

4 しら露や無分別なるおきどころ。　宗因(二)

5 秋かぜやなすびのかずのあらはるゝ。　木白

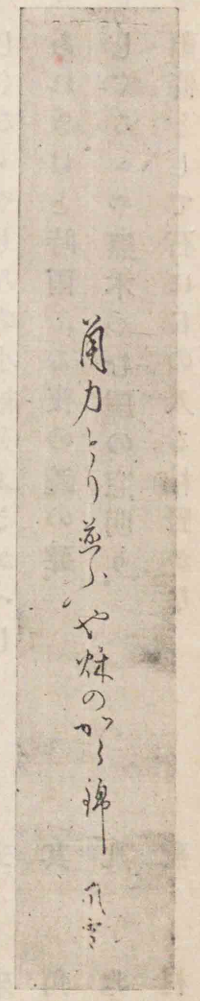
6 名月や池をめぐりて夜もすがら。　芭蕉(三)

7 よもすがら秋風きくや裏の山。　曾良

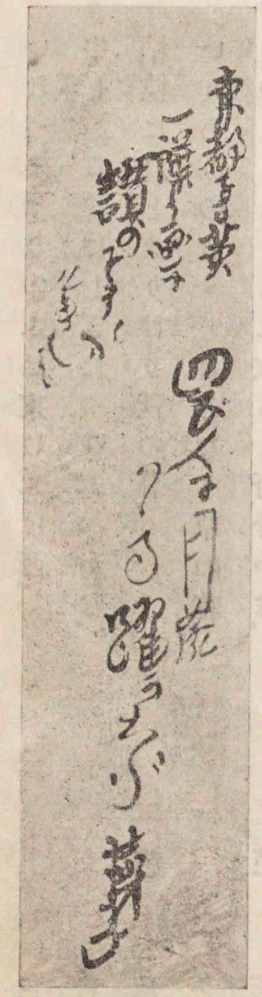
角力とり並ふや秋のから錦　嵐雪

(一)西山氏。檀林派俳諧の祖。天和二年(一六八二)歿、年七十八。
(二)伊賀の人。芭蕉の門人。
(三)岩波氏。信濃諏訪の人。芭蕉の奥の細道の旅行に同行した。寶永七年(一七一〇)歿、年六十二。

東都なる英一蝶か畫に讃のそまれければ四五人に月落かゝる躍かな　蕪村



嵐雪筆蹟

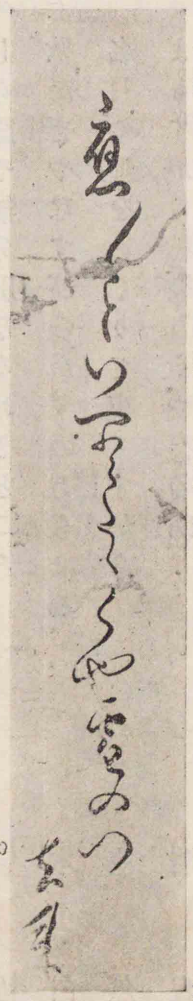


蕪村筆蹟

(一)榎本(寶井)氏。近江の人。蕉門十哲の首といはれた。寶永四年(二三六七年)歿、年四十七。
(二)各務氏。美濃の人。蕉門十哲の一。享保十一年(二三八六年)歿、年六十七。
(三)堀田氏。加賀の人。天明二年(二四四二)歿、年六十三。
(四)向井氏。肥前の人。落柿舎と號し蕉門十哲の一。寶永元年(二三六六)歿、年五十四。

應〳〵といへとたゝくや雪の門　去來

8 いなづまやきのふは東けふは西。　一茶
9 牛しかる聲にしぎたつゆふべかな。　丈草
10 枯枝に烏のとまりけり秋の暮。　芭蕉
11 いりあひのきゝどころなり草の花。　一茶
12 ゐのしゝもともに吹るゝ野分かな。　芭蕉
13 よわ〳〵と日の行きとゞく枯野かな。　麥水
14 しぐるゝやもみの小袖をふきかへし。　去來
15 あれきけと時雨ふる夜の鐘の聲。　其角
16 しぐるゝや黑木つむ屋の窓明り。　凡兆
17 蕭條として石に日の入る枯野かな。　蕪村



去來筆蹟

(一)其角。蕉門十哲の一。寶永元年(二三六四年)歿、年四十二。
(二)山本氏。尾張の熱田の人。芭蕉の門人。
(三)加賀の金澤の人。芭蕉の門人。
(四)國文學者、俳人。名は武夫。名古屋市の人。昭和三年歿、年五十二。

18 大根びき大根で道ををしへけり。　其角
19 水底を見て來た顏の小鴨かな。　支考
20 こがらしに二日の月のふきちるか。　芭蕉
21 なが〳〵と川一筋や雪の原。　一茶

自修文

俳句評釋

沼波瓊音

俳句は、どうも初のうちはなんだかわかりにくい。てにをはが省いてあつて、片言の様でもあり、判じ物の様でもあり、或はなぞの様でもあるといふ感じを、誰も持つものであるが、決してさうではない。俳句は讀むべき物ではなくて、味はふべき物である。理窟をさつぱりのけてしまつて、直覺的の感情を基として作りもし、味はひもする物である。自分で味はふに限る。だから極端に言へば、俳句を解釋するのは無意味だとも言へる。それで、此所には唯字句の意義などに就いて、一通りの解釋を試みようとするだ

(一)内藤氏。尾張の人。蕉門十哲の一。寶永元年(二三六四年)歿、年四十二。
(二)山本氏。尾張の熱田の人。芭蕉の門人。
(三)加賀の金澤の人。芭蕉の門人。
(四)國文學者、俳人。名は武夫。名古屋市の人。昭和三年歿、年五十二。
てにをは　助詞のこと。
片言　不完全な語。
直覺的　推理や經驗等によらずに直接に知るやうな。

けである。

春

高麗船のようですぎ行く霞かな。　蕪村

高麗船といへば、神功皇后の三韓征伐の少し後頃に、高麗から貢物を持つてくる船が聯想されます。高麗船といふのは、非常に華やかに飾つた船でありませう。それを或人が、春の霞みわたつてゐる日に、海岸で見てゐる事を想像する。向ふの霞の中から、高麗船が非常に綺麗な帆を揭げて沖に現れた。もうこの港へあの船が著くだらうといふので、その頃の優長な人が海岸に待つてゐる。さうすると、その待つてゐる港へは著かずに、ずつと其所を通つて、また向ふの霞の中へ入つて、見えなくなつてしまつた。さういふ有樣を詠んだのです。「高麗船の寄らですぎ行く。」といふ一つの事、それを覆ふのに霞を以てしたのです。高麗船がいかにも春の景色に適當してゐる上に、「寄らですぎ行く。」といひますから、

よらでよらずに。

高麗船　高麗の船。高麗は東明王朱蒙の建國。二十八主六百三十二年。

三韓　高麗、百濟、新羅。

霞みわたつてゐる　一面にぼうつとかすんでゐる。

優長　ゆつたりとして氣の長いこと。

見てゐる人は長く其所に待つたものと見える。非常に長閑な日の景色であります。

春の水山なき國を流れけり。　蕪村

いはゆる舊派の人は、蕪村の句を好みませんが、この句などは、舊派の人にも賞められて居ります。「春の水」といふのは、俳句の一つの題になつて居ります。春の水は、春の河でも春の湖でも何でも宜しい。溫さうに流れてゐる春の水を總稱していひます。此所では川でありませう。春の川が廣い〳〵限りなく廣い平野を、遙かに遠い所へ流れてゐるのを見わたした景色であります。「山なき國」といつてあるが、若しこれを「廣き野原」としたらどうでせう。「春の水廣き野原を流れけり。」見てゐる景色は同じでありますが、「廣き野原」と「山なき國」とは、感じに非常な違があるのです。實際描いてゐる景色は同じでも、言葉の遣ひ方が大變違ふ、この方が強い感覺を與へます。

舊派　新派の對。正岡子規が革新して明治の新調を作つたが、その新調によらない一派を指す。

題　季題のこと。季題とは俳句で句に詠入れる四季をりをりの景物感情。

五月雨　陰暦五月頃降續く長雨。つゆ。梅雨。
(一)山形縣の大河。日本三急流の一。長さ二一六キロメートル。
寂びた　閑寂の趣ある。古びて寂しい。
滔々　水の盛に流れるさま。
なぶらるゝ　もてあそばれる。
(二)度會氏。伊勢の人。蕉門の女流俳人。享保十一年(一七二六年)歿、年七十四。
著眼　目のつけ方。

夏

五月雨をあつめてはやし最上川。(一)　芭蕉

これも名高い句であります。最上川は羽前を流れてゐる大河であります。奥羽地方といへば、何となく寂びた感想が浮ぶ。其所に五月雨が降つてゐる。その五月雨を集めて、滔々と早く流れてゐるといふので、莊嚴な句になつて居ります。

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな。　そ(二)の

暑い時に子を脊負つてゐる。唯それだけでも、だく〳〵汗が出ます。所がその背中の子は、じつとして居りません。背中の上でいたづらをして、髪の毛をいぢつてゐる。髪をなぶられる。そのなぶられるのがいかにも暑い。其所を詠んだのであります。うるさいといふ事と暑いといふ事とを結び附けたのです。作者が女だけに、いかにも女らしい著眼をして居ります。男ではかういふ句は出來ないかも知れません。

(一)新潟縣三島郡出雲崎である。
銀河　天の河のこと。
雄渾　力强くよどみのないこと。
旅愁　旅で感ずるうれひ。旅情のせつなさ。
いたはらんとする程に　なぐさめようとするうちに。
半天　なかぞら。
草の枕　昔旅では假に道の邊などに草を結び枕として宿つたから、旅寢、旅枕の意にいふ。
墨の衣　墨染の衣。芭蕉は行脚僧の姿をしてゐた。

秋

荒海や佐渡に横たふ天の河。　芭蕉

この句は、越後(一)の國の海岸から佐渡が島を望んで詠んだものであります。日本海の浪が荒く立騒いでゐる。さうして銀河が天から佐渡が島へ掛けて横たはつてゐるといふ景色であります。浪の音もどう〳〵と聞えてゐる。銀河が斜に佐渡が島に掛つてゐる。佐渡が島も、暗い晩でありますから、ぼんやり見えるのであります。大變雄渾な句であります。この句の前に、銀河の序として芭蕉は、

窓押開きて暫時の旅愁をいたはらんとする程に、日既に海に沈みて月ほの暗く、銀河半天にかゝり、星きら〳〵とさえたるに、沖の方より浪の音しば〳〵運びて、魂けづる如く、腸ちぎれてそゞろに悲しび來れば、草の枕も定まらず、墨の袂、何故とはなくして絞るばかりになんはべる。

と書いて居ります。「腸ちぎれてそゞろに悲しび來れば。」といふ樣に、非常に雄渾な景に感じて涙を流すといふをりに、自然に發した聲がこの句になつたのであります。古今の俳句でこの句の樣な莊嚴なものは恐らくないでせう。海を詩題とする事は、英國の詩人なども盛にやつて居ります。殊にバイロン(一)はをり〳〵海を題にして居りますが、しかし、かくの如き雄渾な景色を、かくの如く簡單に敍したものは、恐らくないだらうと思ひます。

蜻蛉つりけふはどこまで行つたやら。　千代(二)

これは千代が、自分の子供を失つた後に詠んだ句であるといはれてゐます。何時も蜻蛉を釣りに行つては、遠歩きをしてなかなか歸つて來ない。今日は何時まで待つても歸つて來ないが、一體どこまで蜻蛉を釣りに行つたのであらうかといつたのであります。これは母親が子供を失つた後、まだ生きて居つて、どこかへ行つてゐる樣な氣のする、その瞬間の情を敍べたのでありま

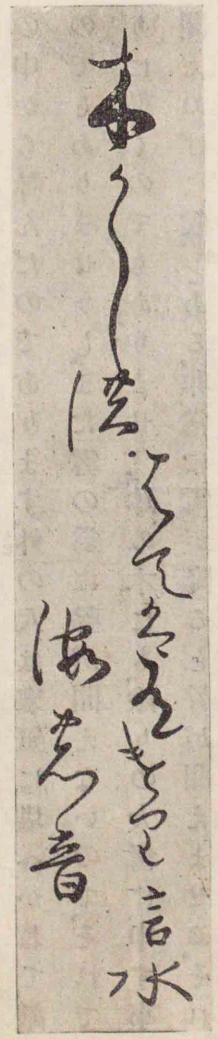
(一) Lord George Gordon　イギリスの詩人。(西紀一七八八—一八二四年)

(二) 女流俳人。加賀の人。安永五年(一七七六)歿、年七十四。

す。始終傍に親しんだ者の死んだ後には、ふと、かういふ感じがするものです。

冬木がらしのはてはありけり海の音。　言水(一)

木枯が永く〳〵吹續いてゐる。非常な音をして吹いてゐる。そのうちに暮方にでもなりましたらうか、その木枯が止んだのです。世間が靜かになると、向ふの方で「どう」といふ音がする。それは海の涙がまだ騷いでゐるのであります。さういふ所を詠んだので、木枯が非常な勢で吹いて、吹靜まつたが、その結果は海の音になつたといふのであります。この句は當時大變評判になりまし



言水筆蹟

(一) 池西則良。奈良の人。享保四年(一七一九)歿、年七十三。

木がらしの
はてはありけ
り海の音　言水

木がらし　冬の頃強く吹く風。

た。その爲に「木枯の言水」といふ異名を附けられたといふ事であります。

應々といへどたゝくや雪の門。　去來

雪の降る晩に、誰か訪ねて來た。とん〳〵と門を敲きますから、「應、々。」とこちらで返事をしても、まだ頻りに敲くといふ句意で、家の中から詠んだのでありますが、外の人は寒氣に堪へかねて敲くのでもありませうし、また雪の爲に聲が聞えないので、それで頻りに敲くのでもありませう。「鉢の木」(一)にも「餘りの大雪に、申す事も聞えぬげに候。」とある。非常に雪が降ると聲が聞えませぬ。それで敲く。兩方の意がありませう。大雪の態をよく表してゐる。この句に就いて、俳諧蒙求(二)にこんな話があります。去來が嵯峨(三)に居つた時にこの句が出來た。非常に得意で、雪は降らないか知らんと思つてゐたが、夜になると果して大雪で、一尺許積つた。これはいゝ鹽梅(あんばい)と、早速木節(四)の所へ訪ねて行つた。戸を敲いてもなか〳〵開

應々　答へる聲。

(一)謠曲の一曲。聞えぬげ　聞えない樣子。

(二)俳諧學者の參考書。全一册。岡西惟中の著。

(三)今京都市右京區。

(四)望月氏。近江の人。蕉門の俳人。醫を業とした。生歿年不詳。

かない。これは故意に聞えぬ樣に敲いたかも知れませぬが、頻りに敲いて、遂に中へはいつて、この句を出した。さうしたら、「木節大いに驚き、手をうつこと數十、跳り上りて狂するが如し。近來の耳を洗へり。絶唱々々と稱す。去來も自負して、蕉翁死後この句を得て、生前に耳を驚かさゞること口惜しといひき。」といふ事が出て居ります。この話の眞僞はとにかく、餘程面白い句であります。

五　東大寺

薄田泣菫(一)

月がよいので東大寺のあたりへ出掛ける。すく〳〵と大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙の樣に迷うてゐる。この樣な宵に、木立の下路で迷ひでもするものなら、きつと鬼の落したまじものゝ係蹄(わな)にかゝつて、夜一夜歩き廻つた所で、いつかな路標を見附ける事も出來なからうと思はれる。

故意に　わざと。

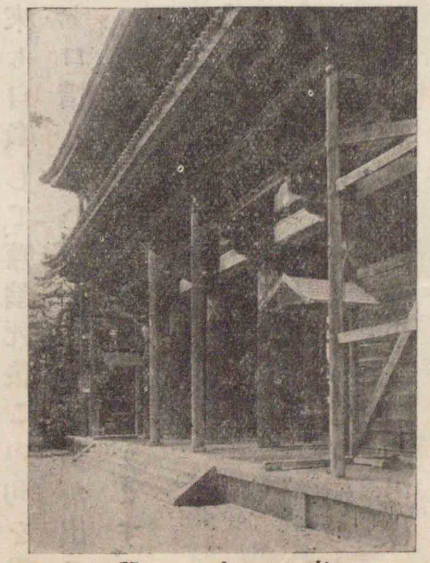
耳を洗へり　名句を聞いた爲に耳を洗つた樣な氣がしたといふ意で、非常に感歎した事をいふ。

絶唱　すぐれた句。秀逸。

(一)詩人。名は淳介。岡山縣の人。明治十年生。

いつかな

南大門は撞木杖をついた翁の樣に、支柱にもたれて、その立派な體をじつと空にもたげてゐる。密迹、金剛二力士は、この靜かな宵にもその三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り、寶杵を揮つて、張肱に控へてゐる。銀の滴の樣な月光が、盜む樣に窓にこぼれて、肩から脹脛にかけて、半身に流れる肉むらの色がいかにも冷く、また美しい。じつと見てゐると、嚴しい顏のどこやらに追懷の「夢心地」が漂うて、靜かにと息をつくかの樣に思はれる。しかしそれも一瞬の間で、再び寶杵を揮つて敎法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

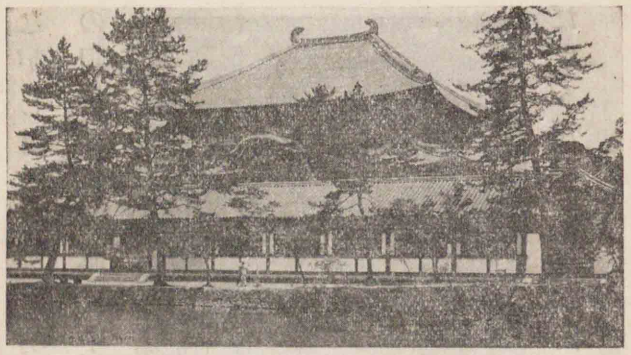


南大門

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にも屆かうといふ長い廻廊は、

居丈高

鳥の翼の樣に左右に開いて、はては見えずなる門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもある事か、どこやらにさゝやく樣な響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはまたもとの靜寂に返る。天人の足音も聞えさうな宵である。この樣な靜かな夜をじつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。(一)永祿の昔佛殿が炎上してから後百三十餘の夏冬を、佛は何時も露宿でいらせられたといふ。その頃は夢の樣な月夜の靜けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どこと



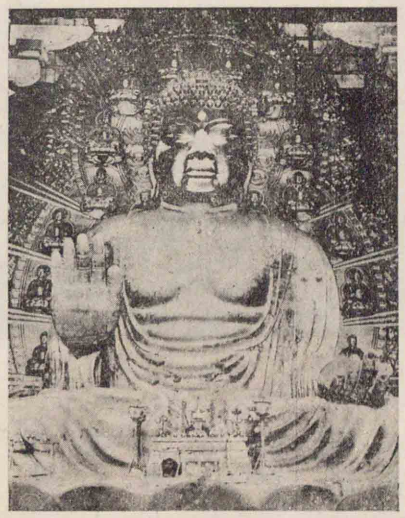
大佛殿

(一)永祿十年松永久秀の兵火に罹つた。

(一)添上郡の西北を流れる大和川の上流。
(二)生駒郡平城村の古名。
法界　閻浮の世

も知らず、十六夜薔薇の匂ふ卯月の宵に、春日野の木立より漏れるながし目の様な月明にぬれながら、または佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれ程美しく、また偉大な者であつたか。今宵それ等の追懷に、しみじみと寂寞の盃を味はうてゐられるかも知れぬ。

あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵はもう夜半過の心持がする。

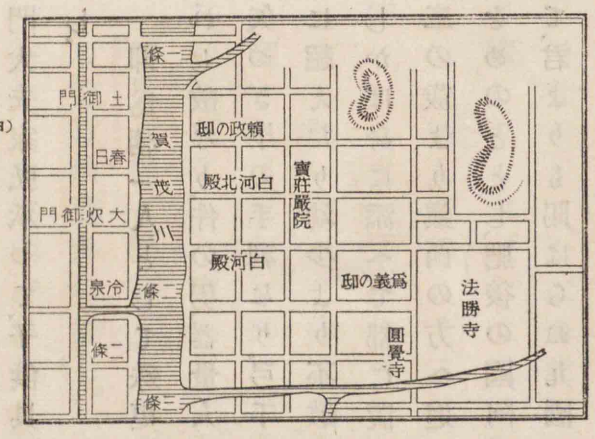


大佛

○六　鎭西八郎

(一)崇德上皇。
(二)左大臣藤原頼長。保元元年(一八一六年)に敗死した。年三十七。
(三)義朝の父。保元年敗れて殺された。年六十二。
(四)爲義の第八子。保元の亂に捕へられて伊豆大島に流され、嘉應二年(一八三〇年)自殺した。年三十二。

新院(一)は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府(二)は車にて參り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に、東、西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人、並びに多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義(三)承つて、父子六人して固めたり。その勢百騎許には過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて、多分は内裏へ參りけり。



圖戰

茲に鎭西八郎爲朝(四)は、「我は親にも連れまじ。兄にも具すまじ。高名、不覺も紛れぬ様に、唯一人いかにも强からん方へさし向け給へ。た

矢つぎ早の手利
弓手
馬手
不孝す

とひ千騎もあれ、萬騎もあれ、一方は射拂はんずるなり。」とぞ申しける。よつて西の河原表の門をぞ固めける。北の春日表の門をば左衛門大夫家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞ聞えし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたる事、武勇天下に許されし故なり。件の男、器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引く事世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば惡しかりなんとて、父不孝して、十三の歳より鎭西の方へ追下すに、豐後の國に居住し、尾張權守家遠をめのととし、肥後の國阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が婿に成つて、君よりも賜はらぬ九國の總追捕使と號して、筑紫を從へんとしければ、菊池、原田を始めとして、所々に城を構へて立籠れば、「その儀ならば、いで落いて見せん。」とて、未だ勢も附かざるに、忠國ばかりを案內者として、十三の歳の三月の末より、十五の歳の十月まで、大事の軍をする事二十餘度、城を落す事數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術人に勝れて、三年がうちに九國を皆攻落して、自ら總追捕使におし成つて、惡行多かりけるにや、香椎宮の神人等都に上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、德大寺中納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。

「源爲朝久しく宰府に住し、朝憲を忽諸にし、咸く綸言に背く。梟惡頻りに聞え、狼藉尤も甚だし。早くその身を禁進せしむべし。依つて宣旨執達件の如し。」

然れども爲朝尙參洛せざりければ、同じき二年四月三日、父爲義を解官せられて、前檢非違使に成されけり。爲朝これを聞きて、「親の科に當り給ふらんこそあさましけれ。その儀ならば、我こそいかな

(一)福岡縣(筑前國)粕屋郡香椎村。神功皇后を祀る官幣大社。
(二)近衛天皇の御代。(一八一四年)
忽諸
綸言
狼藉
參洛
解官

(一)漢の高祖の臣。鴻門の會に武威を示した勇武な人。
(二)漢の高祖の臣。智謀を以て高祖の偉業を助けた。
(三)(四)共に支那古代の有名な兵法家。
(五)支那周代の弓術家。百歩距てて柳の葉を射、百發百中であつたといふ。

る罪科にも行はれんずれ。」とて、急ぎ上りければ、國人共も上洛すべき由申しけれども、「大勢にて罷り上らん事、上聞穏便ならず。」とて、形の如くに附從ふ兵ばかり召具しけり。依つて去年より在京したりしを、父不孝を宥して、今度の御大事に召具しけるなり。

爲朝は七尺許なる男の目角二つ切れたるが、紺地に色々の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以てをどしたる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るまゝに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にてつく打つたるに、三十六差したる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、樊噲(一)もかくやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良(二)にも劣らざれば、堅き陣を破る事吳子(三)孫子(四)が難しとする所を得、弓は養由(五)をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふ事なし。上皇を始め參らせて、あらゆる人々、音に聞ゆる爲朝

(一)假内裏。後白河天皇の御所。

心にくし

へろ〳〵矢

駕輿丁

見んとて擧り給ふ。

左府乃ち、「合戰の趣計らひ申せ。」と宣ひければ、畏まつて、「爲朝久しく鎭西に居住仕つて、九國の者ども從へ候について、大小の合戰數を知らず。中にもせつかくの合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り、或は城を攻めて敵を滅すにも、皆利を得る事夜討に如く事はべらず。然れば只今高松殿(一)に押寄せ、三方に火をかけ、一方にて支へ候はんに、火を遁れん者は矢を免るべからず、矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方、心にくゝも候はず。但し兄にて候義朝などこそ駈出でんずらめ。それも眞中さして射通し候ひなん。まして清盛などがへろ〳〵矢、何程の事か候べき、鎧の袖にて拂ひ蹴散して捨てなん。行幸他所へ成らば、御免されを蒙つて、御供の者少々射んずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃去り候はんずらん。その時爲朝參り向ひ、行幸をこの御所へ成し奉り、君を

掌を反す如し

(一)頼長の父忠實。

承服

御位に卽け參らせん事、掌を反す如くに候べし。主上を迎へ參らせん事、爲朝矢二つ三つ放さんずるばかりにて、未だ天の明けざらん前に勝負を決せん條、何の疑か候べき。」と、憚る所もなく申したりければ、左府「爲朝が申す樣、以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事、汝等が同士軍、十騎、二十騎の私事なり。さすが主上、上皇の御國爭に、源平數を盡して兩方にあつて勝負を決せんに、むげに然るべからず。その上、南都の衆徒を召さるゝ事あり。興福寺の信實、玄實等、吉野、十津河の指矢三町、遠矢八町といふ者どもを召具して、千餘騎にて參るが、今夜は宇治に著き、富家(一)殿の見參に入り、曉此所へ參るべし。彼等待調へて合戰をば致すべし。また明日院司の公卿、殿上人を催さんに、參らざる者どもをば死罪に行ふべし。首を刎ぬる事兩三人に及ばば、殘はなどか參らざるべき。」と仰せられければ、爲朝上には承服申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ如何あらん。義朝は武略の奥儀を究めたる者なれば、定めて今夜寄せんとぞ仕り候らん。明日までも延べばこそ、吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押寄せて風上に火をかけたらんには、戰ふともいかでか利あらんや。敵勝つに乘る程ならば、誰か一人安穩なるべき。口惜しき事かな。」とぞ申しける。

—保元物語—

(一)劇作家。名は敬二。東京市の人。明治五年生。

七　夜叉王

登場人物

面作師　夜叉王
夜叉王の娘　桂
同　楓

岡本綺堂

(一)靜岡縣(伊豆國)田方郡修善寺町にある。曹洞宗の古刹。建仁三年(一八六三年)頼家は此所に幽閉された。

(二)一八六四年。源頼家の弑せられた日。

源左金吾頼家
下田五郎景安
修禪寺の僧(一)

時
元久元年(二)七月十八日。

場所
伊豆國狩野の庄修善寺村桂川の畔、夜叉王の住家。

藁葺の古びたる二重家體、破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、その後は畑を隔てて、塔の峰續きの山また丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭前には秋草の花咲きたり。

楓、門に立ちて人を見送る體。其所に修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源頼家卿(二十三歳)、後より下田五郎景安(十七八歳)、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧　これ〳〵、將軍家の御微行ぢや。粗相があつてはなりませんぞ。

楓ははつと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉王　思ひも寄らぬお成りとて、何の設けも御座りませぬが、先づあれへお通り下されませ。

頼家は緣に腰うち掛く。

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に殘さんと曩にその方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣して置いたるに、日を經れども出來せず、幾度か延引を申し立てて今までうち過ぎしは、何たる事ぢや。

五郎　たかが面一つの細工、いかに丹精を凝すとも、百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初。その後既に半年をも過ぎ

たるに、未だ獻上致さぬとは餘りの懈怠、最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。

頼家　余は生れついての性急ぢや。何時まで待てど暮せどもち明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は、使など遣す事無用と、余が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠りをるか。子細を言へ。子細を申せ。

夜叉王　御立腹恐れ入りまして御座りまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いかでかなほざりに存じませうや。御用承りて既に半年、未熟ながらも腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意にかなふ程の物一つもなく、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。

頼家　えゝ、催促の都度に同じ事を……その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は、唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。

夜叉王　その期日は申し上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠なんどとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打ちこむ面作師。五體に漲る精力が、兩の腕におのづから集る時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、始めて面も作られまする。但しその時が、半月の後か一月の後か、或は一年二年の後か、我ながらしかとはわかりませぬ。

僧　これ〳〵夜叉王殿。上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放しうなぎを見る様に、ぬらくらりと取止のない事ばかり申し上げてゐたら、御癇癖が愈募らう程に、こなたも職人冥利、何時の頃までと日を限つて、しかと

(一)靜岡縣（伊豆國一田方郡三島町にある。官幣大社。）（鰻）

（祟）

御返事を申すがよからう。

夜叉王　ぢやと言うて出來ぬものはのう。

僧　何のこなたの腕で出來ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京、鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王　さあ、それ故に出來ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王といへば、人にも少しは知られた者、たとひお咎受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に殘すのは、いかにも無念ぢや。

頼家　なに、無念ぢやと……。さらばいかなるたゝりを受けうとも、早急には出來ぬと言ふか。

夜叉王　恐ながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

癇癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引取つて、あはや拔かんとす。奥より桂走り出で、

桂　まあ〳〵お待ち下さりませ。

頼家　えゝ、退け〳〵。

桂　先づお鎭まり下さりませ。面は只今獻上致しまする。のう父様。

と顧れども、夜叉王は默して答へず。

五郎　なに、面は既に出來してをるか。

頼家　えゝ、おのれ、前後不ぞろひの事を申し立てて、余を欺かうでな。

桂　いえ〳〵、うそいつはりでは御座りませぬ。面は確かに出來して居りまする。これ父様、もうこの上は是非が御座んすまい、

楓　ほんにさうぢやゆふべ漸く出來したといふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出來した面があるならば、早う上様にさし上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜叉王　命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、その面を持つて來て、ともかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、〳〵。

楓　あい、〳〵。

細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持出づ。桂受取りて、

頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて、少し〳〵解けたる體なり。

桂　いつはりならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面を取りてうち眺め、思はず感歎の聲を揚げる。

頼家　おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫ぢや。

頼家　むゝ。

と、飽かずうちまもる。

僧はしたり顏に、

僧　さればこそ言はぬ事か。これ程の物が出來してゐながら、とかう澁つてをられたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢやは、ゝ、ゝ、ゝ。

夜叉王、容を改めて、

夜叉王　何分にも我が心にかなはぬ細工。人には見せじと存じましたが、かう相成つては致し方も御座りませぬ。方々にはその面を、何と御覽なされまする。

頼家　さすがは夜叉王、天晴の者ぢや。頼家も滿足したぞ。

夜叉王　天晴との御賞美は、憚ながらおめがね違ひ。それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎　面が死んでをるとは……。

夜叉王　年來數多打つたる面は、生けるが如しと人も言ひ、我も許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直し

ても生きたる色なく、魂魄もなき死人の相……。それは世にある人の面では御座りません、死人の面で御座りまする。

五郎　そちはさ様に申しても、我等の眼には、やはり生きたる人の面……、死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉王　いや〳〵、どう見直しても、生ある人では御座りません。しかも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き怨靈怪異なんどの類……。

僧　あゝ、これ〳〵、その樣な不吉な事は申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊。有難く御禮を申されい。

頼家　むゝ。とにかくに、この面は頼家の意にかなうた。持歸るぞ。

夜叉王　たつて御所望と御座りますれば……。

頼家　おゝ所望ぢや。それ。

顎にて示せば、桂は心得て假面を箱にをさむ。頼家立つ。五郎も立つ。桂、箱を捧げて庭におり立つ。

僧　やれ〳〵、これで愚僧も先づ安堵致した。夜叉王殿、明日また逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて、物につまづく。

頼家　おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧は進み出でて、桂に雪洞を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つて案内す。夜叉王はじつと思案の體なり。

楓　父樣、お見送を……。

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎　そちへの御褒美は改めてさたするぞ。

頼家等出で行く。夜叉王起ちあがつて、しばらく默然としてゐたりしが、やがてつか〳〵と緣に上り、細工場より槌を持來りて、壁にかけたる種々の假面を取りおろし、あはや打碎かんとす。楓は驚きて取りすがりて、

楓　あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉王　せつぱ詰つて是非に及ばず、拙き細工を獻上したは、悔んでも返らぬ我が不運。あの樣な面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑をのこさば、一生の名折、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓　さりとは短氣で御座りませう。いかなる名人上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも、天晴名作が出來ようならば、それが卽ち名人では御座りませんか。

夜叉王　むゝ。

夜叉王の舞臺面

楓　拙い細工を世に出したが、さ程無念と思し召さば、これから愈、精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

と、すがりて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を閉ぢたり。日暮れて、笛の音遠く聞ゆ。

——綺堂戲曲集——

八　鈍と根

永井潛[一]

時利あらず雖[すゐ]逝かず、乾坤一擲の關ヶ原[二]の戰に敗れて草深い近江の山中に疫を病んで捉へられた石田三成[三]が、京都へ護送される時の事であつた。途中で咽喉の渴きを覺えた三成は、湯を所望した。所がその邊に湯がなかつたので、警固の者が、

「あいにくこの邊には湯がありませぬ。幸ひ此所に柿がありますから、これをめしあがつては如何で御座いますか。」

(一)生理學者、醫學博士。東京帝國大學教授。廣島縣の人。明治九年生。

時利あらず雖逝かず　楚の項羽が垓下に敗れた時時利あらず騅逝かず、歌つた「力拔レ山兮氣蓋レ世。時不レ利兮騅不レ逝兮可ニ奈何。虞兮虞兮奈レ若何。」

乾坤一擲　(二)岐阜縣（美濃國）不破郡。

(三)秀吉恩顧の武將。近江の人。秀吉の近習より出身して近江佐和山十八萬五千石に封ぜられた。關ヶ原の一戰に敗れ、慶長五年（一六〇〇）三條磧に

斬られた。年三十八。

（緞子）

と尋ねると、三成は、

「いや〳〵、志は有難いが、それは胃腸の病には毒だといふから食べまい。」

と斷つた。間もなく首を刎ねられる身で毒忌もをかしいと、傍の者が嘲つたのを聞いて、三成は微笑しながら、

「お前たちがさう思ふのも無理ではないが、大義を志す者にあつては、假令間もなく首を落されるにしても、いよ〳〵の時までは命を大切にし、どうかして本意を達しようと思ふのが道である。」

と言つたが、家康がこれを聞いて憐んで、どんすの夜著を贈つて來た時、三成は決然としてこれを斥けて言つた、「敵人の恩惠に浴してまでも我が生を貪る心はもたぬ。」と。三成の三成たる面目が躍如としてゐるではないか。誠に爲すある人間の心掛は、常人と異なるものゝある事を深く感ぜしめるのである。

昔から、立身出世になくてはならない條件として、運、鈍、根の三つを數へて來たが、生活が行詰り、餘裕が少くなつた近頃では、それに金を加へんとする者もある樣である。

運とは人力で如何ともし難い、少くとも如何ともし難く見える自然の命數を引きくるめたもので、神ならぬ人間では、出世の準備にしたくも、どうにもならないものかも知れぬ。さりながら、「洞物情之向背而握其機、察陰陽之消長乘其運。」と昔の人も敎へてゐる樣に、周到であり機敏である事によつてこの大切な運をつかむ事は、或程度まで不可能の事ではなからう。

次には、何事も營利主義の現代の社會生活では、金が非常な偉力をもつて、立身出世の助になる事は言ふまでもないが、しかし、多くの場合にあつては、金をまうける事それ自身が、立身出世の重要な一方面をなしてゐるのであるから、初めから金力をもつて競爭場

崛起

恬然

裡に臨んだのでは、たとひその優者となつた所で、金の上に金の鍍金をする樣なもので、それでは一向に精華なく、光彩なく、痛快味がない。しかも金をもつてゐるが爲に、或は金の奴隸となり、或は金の爲に軟化して、却つて立身出世を妨げる場合も少くはないのである。この事は、古往今來、偉人傑士が多く貧賤な階級から崛起してゐるのを見てもわかるし、また心ある人士が、兒孫の爲に美田を買はなかつた理由も首肯されるのである。して見ると、立身出世の大切な準備は、所詮は鈍と根との二つに歸著すると言ふべきである。

そして、鈍と根とは、畢竟するに體力の問題に外ならぬ。體力旺盛で心身が常に健かであれば、心廣く體ゆたかであつて、物事に動ずる事がない。いはゆる得意恬然、失意泰然で、得る事があつても調子に乘らず、失ふ事があつても敢へていぢけず、自若として終始正しきに居り、正しきに處する事が出來る。これ卽ち鈍の成功に大切な

鬱屈

猜疑

所以である。

これに反して、體力は萎靡し身體が虛弱であると、精神もおのづから萎靡し、心身が鬱屈すると必ず神經過敏となり、事每に焦燥憂苦して進退常に節度を失ひ、或はひたすら感情に馳せて輕擧妄動し、或は猜疑嫉妬して世と相容れず、必然失敗の谷底に陷るのである。殊にこの關係は、劇甚な生存競爭の渦中に喘ぎつゝある近代人に取つて、最も大切な意義を持つてゐる。更にまた、根が完全な健康によつて始めて保持される事は明々白々であつて、改めて言ふまでもないのである。

人が世に立ち志を遂げる上に、かくばかり大切な關係をもつ所の體力は、その人が既に或程度の成功を收め、活動の地位を得て、その材に應じその分に隨つて、世道の進運に寄與し、人生に裨益する所あらんとする場合、一層大切になつてくる。エマスンが言つた樣

に、「人間第一の財産」は何と言つても健康である。若し健康でなかつたならば、人世は唯暗黑あるのみである。一切の名譽も、財寶も、權力も、何等の光彩、何等の幸福をもかち得ないのである。

——人及び人の力——

九　賴朝と義經

九郎御曹司[一]浮島[二]が原に著き給ひ、兵衞佐[三]殿の陣の前、三町許引退いて陣を取り、暫く息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、「此所に白旗白じるしにて、淸げなる武者五六十騎許見えたるは、誰なるらん、おぼつかなし。假名實名を尋ねて參れ。」とて、堀、彌太郎を御使にて遣さる。家子、郎等數多引具して參る。間を隔てて、彌太郎一騎進み出で申しけるは、「此所に白じるしにておはしまし候は、誰人にてわたらせ候ぞ。假名、實名を確かに承り候へと、鎌倉殿の仰にて候。」と申

(一)源義經。
(二)靜岡縣（駿河國）駿東郡。愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野。
(三)源賴朝。

猪頸に著る

放虎（粟野觀鳳筆）

しければ、そのうちに二十四五許なる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の裾金物打ちたるを著、白星の五枚兜にくは形打ちて猪頸に著、大中黑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黑き馬の太く逞しきに乘りたるが、歩ませ出でて申されけるは、「鎌倉殿も知ろしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うてゐ候ひつるが、御旗揚の由承り、夜を日に繼ぎて馳參じて候。見參に入れてたび候へ。」と仰せられければ、堀、彌太郎「さては御兄弟にてまし〳〵けり。」と、馬より飛んでおり、御曹司の乳母子佐[一]

(一)名は忠信。

色代

(一)父左馬頭源義朝。
(二)平清盛の繼母。
(三)蛭ケ小島。

藤三郎を呼出して色代あり、彌太郎一町許馬を引かせけり。かくて佐殿の御前に參り、この由を申し上げければ、佐殿は善惡に騷がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、「さらばこれへおはしまし候へ。見參せん。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きに悅び、急ぎ參り給ふ。佐殿つく〴〵とこれを御覽じて、先づ涙に咽び給へば、御曹司もともに聲を呑みて泣き給ふ。互に心ゆく程泣きて後、佐殿涙を抑へて、「さても頭(一)の殿に後れ奉りて、その後御行方を承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。賴朝、池(二)の尼の宥められしによりて、伊(三)豆の配所にて伊東、北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由は微に承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありとは御忘れ候はで、取敢へず御上り候事、申し盡し難く、悅び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を始めと

(一)源義家。
(二)源義光。

魚と水との如く
とかくの返事もなく

して候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合する人もなし。平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり。賴朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官を上せんとすれば、心安き兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひ難かりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたる樣にこそ思ひ候へ。我等が先祖八(一)幡殿の後三年の合戰に、都におはする御弟刑(二)部丞は內裏に候ひけるが、二百餘騎にて下り、八幡殿と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、賴朝が御邊を待ち得參らせたる心も、いかでかこれにまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を息めん。」と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞ絞られける。これを見て大名、小名、互の心のうち推量られて、皆袖をぞぬらされける。

暫くありて御曹司申されけるは、「仰の如く、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらん、配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬(一)へ參りて、十六まで形の如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、內々平家方便をつくる由承り候間、奧州に下向仕りて、秀衡を賴み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取敢へず馳參る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。身をば君に參らする上は、いかゞ仰に從ひ參らせでは候べき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそこの御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

——義經記——

(一)今京都市東山區。
(二)愛宕郡。丹波の國境。京都市の北方約一二キロメートル。
(三)小說家。名は錄彌。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。
(四)愛知縣知多郡。
(五)岐阜縣（美濃國）不破郡青墓村。昔の驛。義朝は此所で賴朝を見失つたといふ。

自修文。

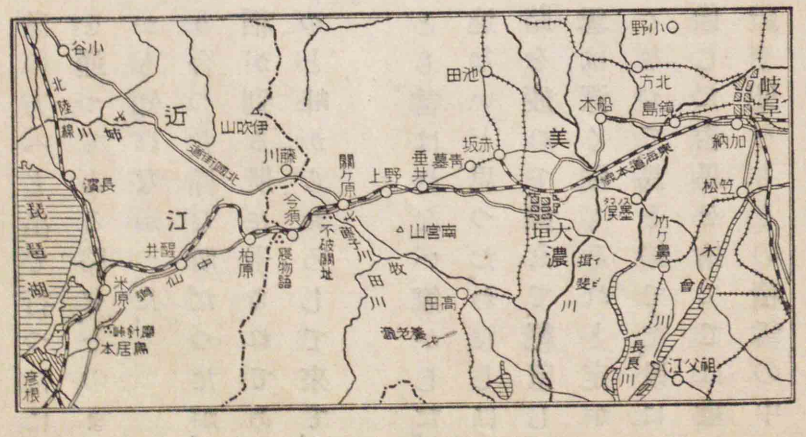
美濃路を行きて

田山花袋(三)

源義朝を書いて見ようと思ひ立つてから、あちこちへと行つて見た。尾張の知多(四)にも行けば、美濃の青墓(五)にも行つた。その北山

の中にある朝長(一)の墓をも展し(てん)した。しかし、一番心を引いたのは、小野(二)の宿(しゆく)から磨針峠(三)を越して、北陸街道に出てくるまでの路を歩いた時だつた。

それは二三年前の晩秋の頃だつたが、ちやうど山の木立が紅葉して、それに午後の日が當つて、何とも言はれない秋の興をわたしにさそつた。無論それは義朝の通つた路であるか、それともその後に出來た者であるかはわからなかつたけれども、とにかく義朝は中仙道は通らずに、——嚴重に敵が固めてゐるらしい不破(四)の關にはかゝらずに、小野の宿を少し行つたあたりか



(一)賴朝の兄。重傷のため自由を失つたので父に殺された。墓は同村元圓興寺谷にある。展したおまゐりをした。
(二)滋賀縣犬上郡鳥居本村の字。古の鳥籠の驛の址。
(三)滋賀縣坂田郡南箕浦村。山上に番場驛がある。
(四)岐阜縣（美濃國）不破郡關ヶ原町の西。

(一)滋賀縣坂田郡。琵琶湖の北方。海拔一三七七メートル。
(二)坂田郡。東海道線と北陸線との接續驛。

家重代

ら、間道を右にそれて、ずつと伊吹山(一)の麓の方へと出て行つたには相違なかつた。或は今の米原(二)驛の前を通つてゐる路を、そのまま遠廻して、北陸街道へと出て行つたかも知れなかつた。

わたしの通つた路は、山と山との重り合つた樣な所だつたが、それでも所々に村があつて、刈上げた稻が到る所に干されてあるのをわたしは見た。時には木枯がさつと峰からおろして來て、木の葉がばら〳〵とあたりに散つた。

わたしの心は義朝で一杯だつた。何とも言はれない氣がした。彼は確かに此所を通つて行つたに相違ないと思つた。わたしは騎馬の武者が七八人、この山に沿つた路を疲れて、饑ゑて、絶望して通つて行つた樣を想像した。次第に雪は深く、路もそれと定かにはわからず、後には馬の足も立たなくなつて、馬を捨てて、跣にならなければならなくなつた樣を想像した。否、馬を捨ててはくつてとても歩けないので、家重代の鎧や兜をも、その積雪の中

狹隘

(一)關ケ原驛の西北。今關ケ原町に屬してゐる。
(二)不破郡。關ケ原町と垂井町との中間。
(三)不破郡垂井町。

に脫捨てて行かなければならなくなつた樣を想像した。

何といふ面白い事だらう。この關ケ原の狹隘は、今でも雪の多く積る所で、一月、二月の頃には、名古屋は日影が暖で春の樣であるのに、其所にはいると、忽ち凄じい吹雪になる樣な事が、往々にしてあるではないか。そしてわたしたちも、その義朝の遭逢した雪にたび〳〵逢ふ事があつたのではないか。わたしは其所らに、雪に後れて、唯一人悲しくさまよつてゐる幼い賴朝を、はつきり描き出す事が出來る樣な氣がした。

わたしは時には汽車の線路に沿ひ、時にはがさ〳〵と林を分けて、すぐ眼前に大きな伊吹山を見つゝ、うね〳〵と曲つた路を、賴朝が徐に歩いて行つた事を頭に繰返した。林の中には小さな川が潺々として流れ、小鳥が鈴の樣な音を立てて鳴いてゐた。

餘程こちらに來てから、(一)小關といふ村があつた。その村もわたしには懷かしかつた。義朝は確かに、其所から山沿に、(二)野上や垂井(三)

の方は通らずに、もつと北の山寄りの路を、こつそりと青墓へたどつて行つたのであつた。

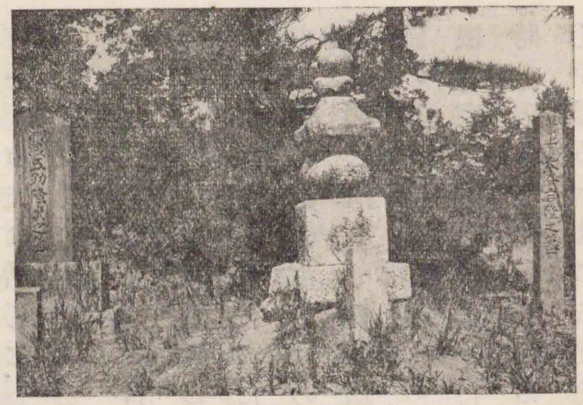
わたしは一度は關ヶ原驛で下りた。それは三月の中頃で、梅は既に白く咲過ぎてはゐたけれども、峰からおろしてくる風は、頰を刺す樣に寒かつた。わたしは車で石田三成の陣を布いた跡まで行つて、そして引返して汽車のレールを越した。大きな犬を車の梶棒につけた車夫は話した、

「何しろ此所らは雪が深いのですからな。犬でもつけなければ、とても車は動きはしませんよ。……え、え、力になりますとも……大きなのになると、綱引くらゐには役に立ちますよ。」

不破の關の址のある邊は、何とも言はれない感じをわたしにさそつた。わたしは天武天皇の事などをすら頭に浮べた。それは何の事はない、歷史が幾段にもなつて、細かに織りこまれてある樣な所で、一木一草にも、丘と丘とのなびきにも、林の中からさし

(一)第四十代。

透る日影にも、すべて心を引かれずにはゐられなかつた。(一)關の藤川――さら〳〵と敷石の上を流れ落ちてゐるあの淺い川の畔にも、わたしはどんなに長く車を駐めて、眺め入つたか知れなかつた。



大谷吉隆の墓

(二)大谷刑部の墓は、街道から五六町、丘の中に全く埋められる樣な所にあつた。その石浮屠の前に立つた時には、わたしは感慨無量だつた。わたしは駕籠に乘つて隊を指揮したといふ體の不自由な勇ましい彼を、そのまゝ其所に發見した樣な氣がした。また五助といふ僕がその遺言を守つて、敵に知られない樣に、その主人の首を此所に埋めた時の光景を、はつきりと見た樣な氣がした。わたし

(一)今の藤子川。伊吹山麓に發し、北國街道を經て揖斐川に入る。

(二)越前國（福井縣）敦賀の城主。名は吉繼、後に吉隆。秀吉に用ひられ、慶長五年（二六〇年）關ヶ原の役に三成に黨したが、藤堂高虎等に破られ、僕（五助）に首をはねさせた。年四十二。

浮屠　感慨無量

は長い間手を合せて、其所に立つてゐた。

「この墓は今でも藤堂家で年々掃除してゐます。……」

かう車夫は話した。

「ふん、さうかね。」

わたしは「時」といふ羽風が、かうしてゐるうちにも、人間を永劫の中に連れて行つてゐる事を、思はずにはゐられなかつた。

それから少し行つた所には、鶯の瀧などといふのがあつた。汽車の窓からのぞいたのとは違つて、山のたゝずまひも面白ければ、道路に沿うて村が點綴されてあるのも趣があつた。午後三時過の日影は、左側の山の上から、廢驛らしい氣分に富んだ板葺屋根の家屋へと斜にさした。常磐御前の墓といふのは、やはりその時分の年代を示してゐる石浮屠で、其所にはその他にも紛らはしい墓石があつたが、その前に霜がれた菜の畑があつたり、おむつを干した物干竿が日に照されてあつたりしたのが、一種スケッ

(一)伊勢國（三重縣）津の城主。中興の祖高虎は秀吉に仕へて功をたて七萬石を受けた。秀吉の死後は家康に從ひ、關ヶ原の戰の功などで遂に三十二萬石となつた。今伯爵家。

(二)義朝の侍女。義經の母。

(三)sketch.

チを見た樣な感じをわたしに誘つた。少し行くと、汽車のレールが下に大きなカーブを開いてゐた。

今は殆ど土地の者が通らなくなつてゐるこの山間の道。——其所には嘗てどんなに色々な者が通つたであらうか。どんなに樣々な色彩が日夜渦を卷いたであらうか。市女笠も通つたらう。騎馬の武者も通つたらう。京から鎌倉へ護送される罪人も通つたらう。生活のたづきを求めに京へと上つて行く者もあつたらう。車も通れば、輿も通つたらう。戸毎に托鉢して行く僧もあつたらう。隨つてその頃には、此所らも賑やかで、德川時代の東海道の樣な事はなかつたにしても、休茶屋もあれば、宿屋もあり、酒屋などもあつたであらう。例の中仙道の名所の一つであつた近江と美濃との境の寢物語の舊蹟には、徒に霜がれた菜の畑があるばかりで、今は家屋すらないけれども、それでも柏原の驛は却つて

curve

市女笠　昔婦人のかぶつた漆塗の凸字形の笠。

たづき　たより。手段。

(二)滋賀縣坂田郡柏原村長久寺にある。兩國の境に民家が一戸あつて、寢ながら兩國の物語をしたといふ。

榮えて、少し行つた所には、自轉車の二三輛も置いてある小間物屋や、大きな二階建の旅館や、人の出入の多いらしい料理屋などが、庇を連ねて並んでゐるのを見た。

その驛を外れて少し入つた所へとわたしは行つた。それはわたしに取つて忘れられない跡の一つであつた。それは他でもなかつた。鎌倉に引かれて行く途中、此所で斬られた源具行の墓であつた。

それは、もはや午後四時過だつた。わたしは林の影の長く地に曳いてゐるのを見た。向ふの山のひだが、光線の加減で一種淡い紫の色を著けて來てゐるのを見た。私は何とも言はれない氣がした。此所まで連れられて來て、先に行かうともせずに、一日二日と滯在してゐるので、自分の運命がひとり手にわかつて來た時の具行の心をわたしは想像した。また彼の妻は後醍醐天皇の更衣の一人であつたのを、天皇が具行に賜はつたのであつた。そし

(一)後醍醐天皇に近侍してゐたが、笠置山の陷つた後、北條高時にとらへられ、元弘二年(一九九二年)柏原で殺された。

更衣　昔宮中に仕へた女官。

て具行が此所で殺されたといふ事を聞いて、悲涙堪難く、終に髪を斷つて近江の高島(一)の寺に隱れたといふ事を、わたしは繰返し思ひ出した。わたしはその時代の空氣の中に、身も心もすつかり浸つてしまつた樣な悲しさと、懷かしさとを感じた。少くとも彼は此所に來て、あの向ふの山を見、あの左に聳えてゐる伊吹山を仰ぎ、また今と同じ樣に、午後四時過の日影が林にさし透つて來たのを見たのに相違なかつた。――否、この山間の道も賑やかで、色々な色彩が渦を卷いてゐたではあらうけれども、とにかく、日影は此方の丘の裾から向ふの丘の裾へと靡いて行つてゐたに相違ないのだ。わたしはじつとあたりを眺めた。

一〇　舊都の月

後德大寺(二)の左大將實定は、舊都(三)の月をこひわびて、入道(四)に暇を乞ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、憂世の旅の思出

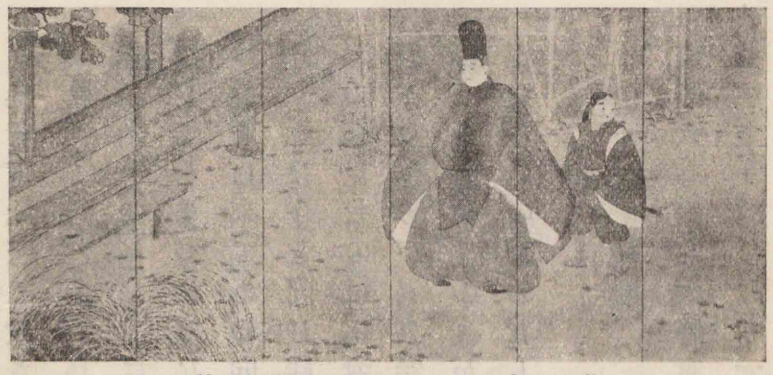
(一)滋賀縣高島郡高島鄕。今の安曇村。

(二)歌人。建久二年(一八五一年)歿、年五十三。

(三)京都のこと。當時都は遷されて福原にあつた。

(四)平清盛。

(一)兵庫縣（攝津國）にあつた名所。武庫郡魚崎から深江邊の濱をいつたらしい。
(二)今の御影附近。
(三)武庫郡布引山にある。當時紀州那智瀑を第一とし、この瀑を第二とした。
(四)「はるゝ夜の星か河邊の螢かも、わが住む方のあまのたく火か。」（新古今集）
(五)兵庫縣（攝津國）川邊郡猪名川の河口。
(六)同郡稻野の舊名。
(七)「見わたせば山もと霞む水無瀬川、ゆふべは秋となに思ひけん。」（増鏡、後鳥羽天皇）



舊都の月（乾南陽筆）

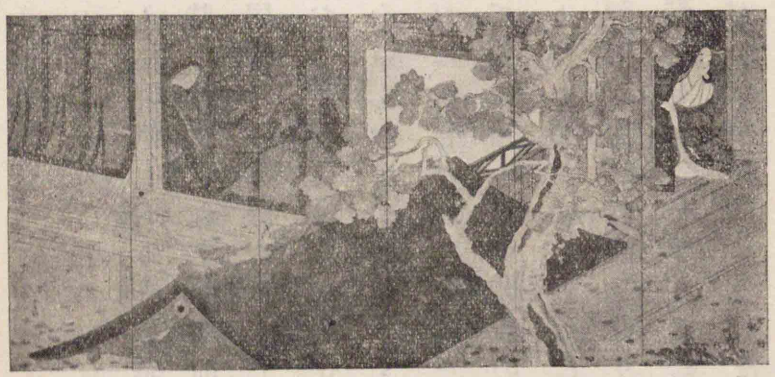
に、名所々々を訪ひ見てぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀(一)の松原、みかげ(二)の松。雲居に曝す布引(三)は、我が朝第二の瀑とかや。業平の中將の、かの瀑見ての歸るさに、星(四)か河邊の螢かと、浦路遙かに眺めけん、何所なるらんおぼつかなし。(五)なの湊の曙に、霧たちこむる昆陽(六)の松。必ず春にはあらねども、山本霞む水無瀬(七)川、男山(八)に澄む月は、石清水にや宿るらん。秋の山の紅葉の色、稻葉(九)を渡る風の音、御身に浸みてぞ思しける。

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、偶、殘る門の

(八)大阪府（攝津國）三島郡島本村。山崎驛の南を流れる小川。
(九)京都府（山城國）綴喜郡、山崎驛と淀川を挾んで相對する。山中に石清水といふ泉、山上に石清水八幡宮がある。

蓬かそま（杣）鳥の臥所

(一)皇太后藤原多子（近衛天皇の皇后）の御所。



舊都の月（乾南陽筆）

內、行交ふ人もなければ、淺茅が原、蓬がそまと荒果てて、鳥の臥所となりにけり。八月半ばの事なれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住み、をり知り顏に鳴く雁の、音さへつらくぞ聞し召す。大將はいとゞ哀に堪へずして、大宮(一)の御所に參り、かねて心知れるなにがしの女房して、かくと申させ給ひければ、宮斜ならず御悅ありて、「此方へ。」と仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明し暮し給ひしに、今は幽なる御所の御有樣、軒につた茂り、庭に千草生ひかはす。言問

居待の月

あたりを拂ふ

ふ人もなき宿に、荻吹く風も騒がしく、昔をこふる涙とや、露ぞ袂をぬらしける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえ〳〵に、草のとざしも枯れにけり。大將哀に心の澄みければ、庭上に立ちながら古き詩を詠じ、それより御前に參り給ひけり。八月十八日の事なり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば捲上げて、御琵琶をあそばしてわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、尙や遲しと思しけん、御琵琶をさしおかせ給ひつゝ、御心を澄まさせ給ひけり。大將參り給ひければ、大宮はばちにて、「それへ。」と仰せけり。その御有樣、あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住憂き事語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒行く事を仰せ出して、共に御涙に咽ばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、后の宮は御琵琶をかき寄せさせ給ひて、秋風樂を彈かせ給ふ。侍從は琴を彈きけり。大將は腰より笛を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故鄕の荒行く悲しさを、今樣に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、
淺茅が原とぞ成りにける。
月のひかりはくまなくて、
あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始め參らせて、御所中に候ひ給ひける女房たち、をりから哀に覺えて、皆袂をぞ絞りける。――源平盛衰記――

(一)第九十六代後醍醐天皇。

卿相雲客

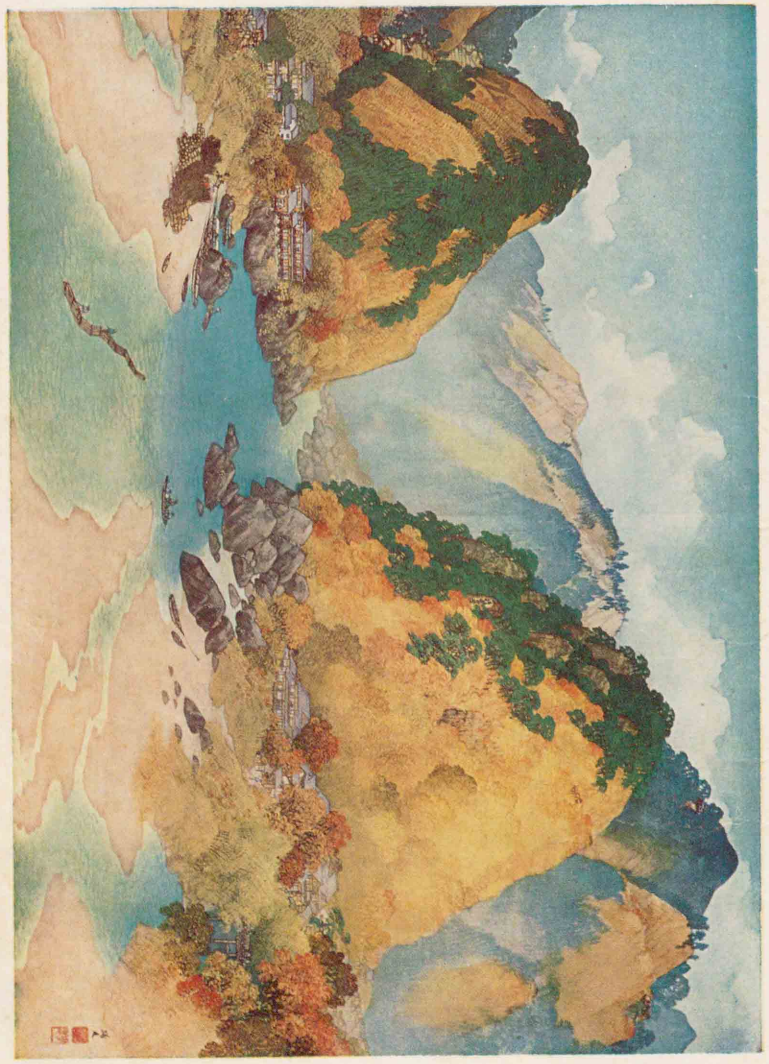
一一　松の下露

さる程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上(一)を始め參らせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、何所を指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町が程こそ、主上を扶け參らせて、前後に御供をも申されたりけれ、風雨烈しく道暗

(一)藤原藤房。
(二)藤原季房。藤房の弟。
十善の天子　田夫野人
心ばかりを盡す
(三)京都府（山城國）綴喜郡多賀村と同郡井出町との境。

うして、敵の鬨の聲此所彼所に聞えければ、次第にわかれ〳〵になりて、後には唯藤房(一)季房(二)二人より外は、主上の御手を引き參らする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ給ひて、其所とも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有樣こそあさましけれ。いかにもして夜のうちに赤阪の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休み、二足には立ちどまり、晝は路の傍なる青塚の蔭に御身を隱させ給ひて、寒草のおろそかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀(三)の御袖をほしあへず。とかくして夜晝三日に、山城の多賀郷なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れて、今はいかなる目に遭ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん



笠置山の秋

庄田鶴友筆

方なくて幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降るかと聞し召して、木の蔭に立寄らせ給ひたるに、下露のはら〳〵と御袖に掛りけるを、主上御覽ぜられて、

さして行く笠置のやまを出でしより
あめがしたにはかくれがもなし。

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん頼むかげとて立寄れば
なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道、松井藏人二人は、この邊の案内者なりければ、山々峰々殘る所なく搜しける間、皇居隱れなく尋ね出され給ふ。主上誠におそろしげなる御氣色にて、「汝等心ある者ならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれ、この君を隱し奉りて義兵を擧げばや。」と思

もだしけるこそうたてけれ

(一)奈良縣山邊郡朝和村大字柚ノ内の稱。
(二)殷の湯王が夏の桀王に夏臺といふ牢獄に投ぜられた事を指す。
(三)勾踐。
(四)今の支那浙江省紹興縣にある山。
(五)京都賀茂川の東で五條と六條との間。北條氏が探題を置いた所。

ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかつて、もだしけるこそうたてけれ。俄の事にて綱代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せ參らせて、先づ南都の内山(一)へ入れ奉る。その體、唯殷湯夏臺(二)に囚はれ、越王會稽(三)に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞きこれを見る人毎に、袖をぬらさずといふ事なかりけり。

この時此所彼所にて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬(四)ども、に至るまでは數ふるに遑あらず。或は籠、輿に召させられ、或は傳馬に乘せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女街に立ちならびて、人目をも憚らず泣悲しむ。あさましかりし有樣なり。

十月二日、(五)六波羅の北方常葉(ときは)駿河守範貞、三千餘騎にて途を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將京へ

龍顏

(一)光嚴院。

は入らずして、すぐに宇治へ參り向ひて龍顏に謁し奉り、先づ三種の神器を渡し給はりて、(一)持明院新院へ參らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より繼體の君、位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉る物なり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握る者ありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、內侍所をば笠置の本堂に棄置き奉りしかば、定めて戰場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸け置きしかば、終にはよも我が國の守とならせ給はぬ事あらじ。寶劍は武家の輩若し天罰を顧ずして玉體に近づき奉る事あらば、自らその刃に伏さ

笠置山行宮址

せ給はんが爲に、暫くも御身を放たるゝ事あるまじきなり。」と仰せられければ、東使兩人も六波羅も、詞なくして退出す。

翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけるを、ささざき臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、强ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に御逗留あつてぞ、六波羅へは入らせ給ひける。日來の行幸に事變りて、鳳輦は數萬の武士にうち圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿、傳馬に扶け乘せられて、七條を東へ河原を上つて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞く人心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸北極の高きに坐して、百司禮儀の裝をつくろひしに、今は白屋東夷の卑しきに下らせ給ひて、萬卒守禦の嚴しきに御心を惱ませる時移り事去り、樂しみ盡きて悲しみ來る。天上の五衰、人間の一炊、唯夢かとのみぞ覺ゆる。

——太平記——

袞衣

天上の五衰人間の一炊

(一)鎌倉時代の歌人。千載集の撰者。元久元年(一八六四年)歿、年九十一。

(二)今の京都市伏見區深草。

(三)江戸時代の國學者。靜廼舍と號した。江戸の人。安永六年(一七七七年)歿、年五十三。

(四)桔梗ヶ原。今長野縣松本市南方の原。天文二十二年(一五五三年)武田信玄が小笠原長時と此所で戰つて大勝を得た。

(五)平安時代の歌人。また詩文をも善くした。永觀元年(一六四三年)歿、年七十三。

(六)鎌倉時代の歌

一二　深草の里

夕されば野邊の秋かぜ身にしみて
うづら鳴くなりふか草の里。　藤原俊成

ものゝふの草むすかばね年ふりて
あき風さむしきちかうが原。　加藤宇萬伎

水の面にてる月なみをかぞふれば
こよひぞ秋のもなかなりける。　源順

した紅葉かつ散る山のゆふ時雨　藤原家隆

人。中納言光隆の子。俊成に學び定家と名を齊しくした。嘉禎三年（一八九七年）歿、年八十。

(一)鎌倉時代の人。四位少將。參議藤原資房の男。

はるのはてさくらたにまた散のこる此春をいくかもなしと誰かいふらむ　眞淵

(二)第七十五代崇德天皇頃の歌人。源俊頼の子。

紅葉浮水

ぬれてやひとり鹿の鳴くらん。

いかだしよ待てこととはん水上は
いかばかり吹く山のあらしぞ。

(一)藤原資宗

賀茂眞淵

信濃なるすがの荒野をとぶわしの
つばさもたわに吹くあらしかな。

(二)俊惠法師

賀茂眞淵筆蹟

(一)江戸時代の歌人。鳥取の林家に生れ和歌の師香川家の養子となつた。その歌風は一時京都の歌壇を風靡した。天保十四年（一五〇三年）歿、年七十六。月前郭公

さやかなる
月ゆゑたにに
もねられぬ
を山ほとゝ
きす鳴夜な
りけり　景樹

(二)鎌倉時代の歌人。俊成の子。新古今集、新勅撰集を撰した。仁治二年（一九〇一年）歿、年八十。

(三)文學者。名は芳衞。高知市の人。大正十四年歿、年五十七。

(四)名は直之。大阪の俠客。赤穗義士に武器

照る月の影のちりくるこゝちして
よるゆく袖にたまる雪かな。

(一)香川景樹

香川景樹筆蹟

こまとめて袖うちはらふかげもなし
佐野のわたりの雪のゆふぐれ。

(二)藤原定家

一三　丈夫の襟度

(三)大町桂月

「天河屋義平は男で御座る。」と忠臣藏に氣焰を吐きし俠商、實の名は(四)天野屋利兵衞とて、赤穗侯の出入の商人なるが、或時赤穗の城中

に赴きしに、夏の事として蟲干あり。定めて珍寶多かるべし、拜見せばやとて、許しを得て見物しけるが、その日貴重なる皿一枚紛失して見えず。利兵衞の盜みしならんと、諸有司皆利兵衞を疑へり。大石良雄止むを得ず利兵衞に告げて曰く、「我、子の人となりを知る。子は決して盜む者にあらず。されど、今日子より外に來りし者なく、諸有司は皆子を疑へり。請ふ、枉げて罪に服せよ。」と。利兵衞一言も辯ぜずしてこれを諾しぬ。さらば斬罪に處せんとて、これを赤穗侯に申し上げけるに、侯曰く、「はやまる事なかれ。皿一枚、我持來りて此所にあり。利兵衞の與り知る所にあらず。」と。茲に於て利兵衞の寃罪は霽れたり。

盜みもせぬに盜みたりと言はるゝ程、腹の立ちて殘念なる事なかるべし。然るに、いかに言ひとくとも疑を霽すべからざるを知りて、一言の未練も言はず、從容笑つて死に就かんとしたる利兵衞の

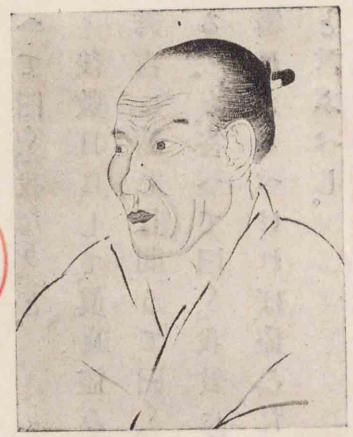
覺悟こそ男らしけれ。[1]

豐臣秀吉にもこれと同じき話あり。秀吉の貧賤なる時、盜難にあひたる人あり。秀吉を疑ひ、盜みたる者は汝にあらざるやと言ふ。答へて曰く、「我なり。」と。

後數日にして、眞に盜みし者あらはれぬ。盜難にあひし者來りて秀吉に謝し、且問うて曰く、「子盜みもせぬに何故盜みたりと言ひたるか。」と。答へて曰く、「我貧にして人に疑はる。たとひ辯解すとも、疑は霽れざるべければ、盜みたりと言ひけるなり。」と。嗚呼、大丈夫の襟度と言ふべし。

光風霽月、洒々落々としていかにも男らしく、つゆ未練を言はず、愚癡をこぼさず。この點に於ては、秀吉も利兵衞もひとしく百代の偉丈夫なり。大悟徹底せる大丈夫にして、始めてこの域に到るを得べし。世の小才子の能く達し得る所にあらず。[2]

人動もすれば曰く、「大石良雄陽つて遊蕩せし間に病死せば如何。永く不忠の名を殘すにあらずや。」と。然らん時は、則ち天なり命なり致し方なしとあきらむるこそ男なれ。よしや、浮世に不忠の名を殘すとも、我が良心に對して疚しからずんば則ち可なり。未練にして愚癡をこぼし、ひたすらに世の噂を氣にするは婦女子の事なり。丈夫たらん者は、能く悟入してこの域に達せざるべからず。



伊藤仁齋

(一)大高坂芝山、書を著して伊藤仁齋(二)の說を駁す。仁齋の門人、仁齋に告げて曰く、「何ぞこれを辯駁せざるや。」と。答へて曰く、「彼今少し學進まば自らその非を覺るべし。」と。眼中人なきものと言ふべし。神經質の小丈夫は、到底この域に達する事能はざるべし。〔3〕

(一)江戸時代の儒者。伊豫松山の藩士。正德三年(一七一三)歿。

(二)江戸時代の儒者。京都の人。寶永二年(一七〇五)歿、年七十九。

人は自ら信ぜざるべからず。我が良心を欺くべからず。我が良心を欺き、人を欺き、色々策略を廻らし、工夫を廻らし、卑劣なる手段までとりて、忠臣、義士、偉人、君子などともてはやされ、生前の虛榮、死後の虛名を博するも何かせん。我は自ら信じて道の爲に盡す。世人我を馬と言はゞ馬と言はしめよ。鹿と言はゞ鹿と言はしめよ。多數の愚人は我を知らずとも、識者は知るべし。現代の識者も知らずとも、後世の識者は知るべし。後世の識者も知らずとも、神は知るべし。神も知らずとも吾我を知る。豈未練を言はんや。愚癡をこぼさんや。世上の毀譽褒貶、我に於て何かあらんや。〔4〕

——桂月全集——

一四　山陰の麒麟兒

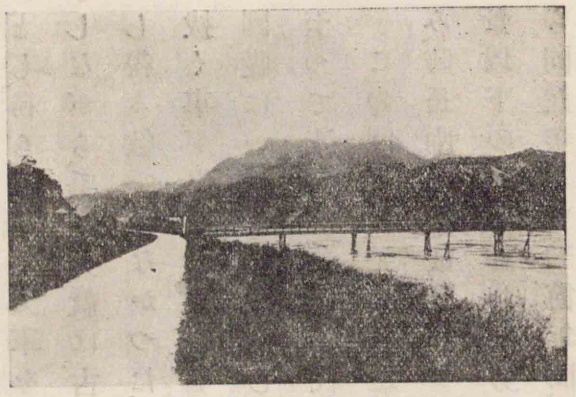
國破れて山河ある所、そゞろに往時を回想すれば、國難に殉じた

(一)二二〇五年。
(二)島根縣（出雲國）能義郡廣瀬町。
(三)名は滿幸、天文十五年歿、年二十七。
(四)立原綱重の女。
(五)晴久の長子。毛利氏と戰ひ守城七年の後降り、薙髮して友林と號した。慶長十五年（二二七〇年）歿。

英傑を哭する情が油然と湧いて來る。一國の命數將に窮らんとする時、挺身能く國基を支へんとする丈夫の胸懷、まして亡國の頽勢を阻止して回天の擧を企て、しかも最後の敗滅を自ら覺悟し、玉碎以て孤忠を貫かんとする灼熱の意氣に至つては、誰かこれに感奮せざる者があらう。山中鹿之助幸盛の生涯は正に男子の眞骨頂。成敗利鈍を顧ず、斃れて後已むの精神を以て終始した盡忠報國の至誠は、その稜々たる俠骨と共に、千載の下、眞に懦夫をして起たしめるの概がある。

山中鹿之助幸盛は(一)天文十四年八月十五日雲州富田月山城の麓に生れた。幼少の頃父を喪ひ(三)、賢母(四)の感化薫陶を受けて成人した。母は自ら家計を立てる傍ら、常に盡忠報國の臣道を説いて、少年鹿之助を鍛へた。彼は幼にして體格强健、膂力極めて逞しく、しかも眉目秀麗の美丈夫であつた。夙に主君尼子義久(五)の近侍となり、殊遇を蒙つてゐた。その身は固より尼子氏の一族で、彼が全生涯を擧げて主家尼子(一)氏の爲に身を挺して惡戰苦鬪する契緣は、既に茲に生じたのである。長ずるに及んで剛毅膽略に富み、勇武絕倫、儕輩を拔いて、いはゆる尼子十勇士の隨一となつた。

(一)佐々木太郎定綱の後裔。九世の孫高久の時尼子氏を稱へた。


月山と富田川

世は應仁の亂後、戰國時代の血腥き凄風吹荒び、群雄四方に割據して、攻城野戰一日として寧日なき亂世であつた。鹿之助の主家尼子氏は四代經久の時勃興し、居城月山城を中心として出雲一圓は勿論、その領域、山陰は因幡以西石見、隱岐に至り、中國は播磨以西安藝に至る十一箇國の大將として時めいた。その孫晴久の時に及び、配

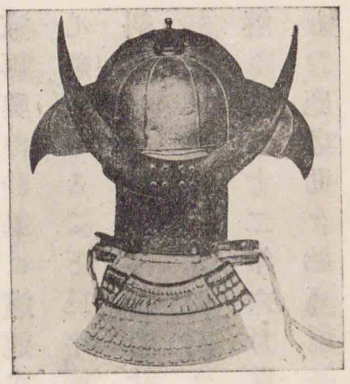
(一)大内義隆。
(二)廣島縣（安藝國）高田郡吉田町。
(三)大内氏の臣。天文二十年その主義隆を襲つてこれを弑したが、弘治元年（二一二一）元就に攻められて自殺した。
(四)元就の第二子。吉川家を繼いだ。天正十四年（二二四六）歿、年五十七。
(五)元就の第三子。小早川家を繼いだ。慶長二年（二二五七）歿、年六十三。

下たる毛利氏は周防大内氏(一)に從つて叛いた。尼子、毛利の葛藤は茲に起つたのである。晴久は自家の勢力を恃み、一擧毛利氏を屠らうとし、自ら五萬の大軍を率ゐて、毛利氏の城下吉田(二)に攻入つた。しかしながら、毛利元就は古今に鳴る將器である。幼弱晴久の能く頡頏し得る敵ではなかつた。されば尼子氏の威勢を以てしても容易に拔く事が出來ず、戰は半歲に及んで、晴久は遂に大敗した。尼子氏の國礎はかくして動搖した。爾來尼子氏の家運振はず、その子義久に至つて流離苦難の時代に遭遇した。

この間毛利元就は逆臣陶晴賢(三)を嚴島に仆し、長驅して周防に進み、防長兩國を征服し、ついで石見を併呑し、更に吉川元春(四)、小早川隆景(五)以下の兵を合し、餘勢を驅つて雲州攻略を開始した。永祿五年から同九年まで五箇年間、毛利勢は尼子氏の本城たる月山城を攻圍した。この時鹿之助は一城將として各所に轉戰し、偉功を樹てた。就

(一)今飯梨川といふ。
(二)猿之助と言つた。身長六尺五寸、力十人をかねた。鹿之助と戰ひ重傷を負つて死んだ。
(三)陰德太平記。
(四)二二二六年。
(五)今大社町。官幣大社出雲大社がある。

中、富田川の中洲に於ける毛利方の剛の者品川大膳亮(一)との一騎打は、壯絕勇武の鹿之助の面目を後世に遺したものである。この日鹿之助の扮裝は、「銀色燦爛たる冑を著し云々。」と或書(二)に見えるが、事實は南蠻鐵で作つた極めて質素な物であつた。蓋しその武威の堂々たる、勇武の卓越した鹿之助の有樣を形容したのではなからうか。けれども大勢は悉く尼子氏に不利であつた。包圍持久の策を採つた毛利勢の攻擊に、月山城の堅壘は潰えた。


鹿之助の冑

時に永祿九年(四)十一月二十一日である。かくして尼子義久は楚囚の身となつた。鹿之助等郎等八十餘人は、杵築(五)の大社までこれに隨行したが、此所で主君と別れねばならなかつた。しかも密に再會を約し、再興を期し、血をすゝつて生死を共にする凄然たる訣別であつ

(一)名は義鎭。豐後、豐前、筑後、肥後を領した。天正十五年(一二四七年)歿、年五十八。
(二)一二二九年。
(三)鳥取縣(伯耆國)西伯郡成實村。
(四)島根縣八束郡法吉村。

た。鹿之助は單身、道士に身をやつして上洛し、竊に時機の到來するのをねらつた。祖國は既に滅び、社稷は既に覆つた。月山城を死守した勇士豪傑は悉く四散した。しかしながら一君亡ぶればまた一君を立て、苟も主家の一塊肉の存する限りは、恥を忍び辱を包んで、主家再興の壯擧に邁進するのは臣道の極致である。鹿之助は爾來苦心經營すること三年、或は豐後の大友氏と結び、或は中國の同志を糾合して、百方再擧の計を廻らしてゐた。

機は熟した。毛利氏は尼子氏の滅亡と共に、大友宗麟[一]との盟約を解き、永祿十二年六月進んでこれを討たうとして、主力を九州に移した。鹿之助を始め尼子の遺臣はこの虛に乘じ、孤君勝久を奉じて織田信長の援助を求め、舊好の士約三千を併せ得て故國に討入り、先づ新山[三]を取り末次[四]に築いて、數箇月の間に殆ど雲州一國を平定し、更に兵を國外に出して諸國の經略に當り、意氣衝天の勢を示し

(一)政弘の第二子。
(二)政弘の第四子。
(三)山口縣山口市。
(四)山口縣(長門國)長府町。
(五)一二二三〇年。
(六)島根縣能義郡布部村。
(七)宍道湖の海に注ぐ附近。

た。これと共に大內義興の弟輝弘[二]もまた反旗を翻して、周防の山口[三]に侵入した。時に元就は長府[四]にあつたが、事態の容易でない事を看取し、九州攻伐を中止して、元春、隆景を九州から召還し、元春をして輝弘を討たしめ、然る後諸般の準備を整へ、元龜[五]元年正月嫡孫輝元を總帥として、雪深き雲州へ大兵を進めた。鹿之助は富田の南方三里許の布部[六]山に據つて、これを阻止しようとしたが、衆寡敵せず、忽ちにして粉碎されてしまつた。

かくして尼子氏の勢威は益〻衰へ、末次城先づ陷り、今は唯新山の孤城を死守するに過ぎなかつた。偶〻元就病んで仆れ、輝元、隆景等は急遽鄉國に還つた。茲に於て尼子勢は俄に色めき立つた。勝久は末次を攻める、鹿之助は羽倉山[七]を圍む、國中到る所に火の手は擧つたが、戰は重ねて利なく、尼子氏の運命は漸く切迫した。獨り陣中にあつて父の死に遭はなかつた吉川元春は、慨然として弔合戰の意を

決し、鹿之助の固守する殘壘(一)末石城を攻めて、これを陷れた。乃ち鹿之助は恨を呑んで元春に降服したのである。

けれども九死に一生を求めて再起に備へようとする彼の苦衷は、よし降服が武士たる者の本分にあらずとしても、また一掬の涙なきを得なかつた。果然彼は監禁を逃れて落延びた。ついで新山城もまた落ちた。尼子の主從は再び故國を去つて京師に到つた。時に京都に於ては織田信長の威權が愈〻加り、足利將軍義昭は信長に背いて遠く中國に走り、毛利氏に賴つて將軍職を回復しようとした。毛利氏はこれによつて霸業を夢想し、織田氏と一戰を交へる決心をした。信長はまた尼子氏を援助して毛利征伐を敢行せんとし、兩者の危機は次第に接近した。(二)天正二年正月、鹿之助は信長の後援を恃み、再び尼子家再興の兵を擧げて因州に亂入したが、武運拙き尼子勢の意氣は更に揚らず、同四年五月鹿之助は勝久と共に三たび

(一)伯耆の大山の麓川岡の稱。

(二)二三三四年。

京都に逃亡した。翌五年となつて、羽柴秀吉は信長の命を受けて中國征伐の途に上り、同年十一月播州上月(うづき)城を陷れて此所に尼子勝久を入れ、鹿之助以下尼子勢を以て固めさせた。この報に接した毛利氏は直ちに上月城再攻の軍を起し、翌六年四月五萬の大軍を以て城を包圍し、糧道を斷つた。籠城八旬、防戰に疲れ飢餓に衰へて、その窮狀は言語に絶した。ましてし城の內外相通ずるの策なく、加ふるに友軍(二)は隣接の地を撤退するに及んで、陷落の日は近づいた。鹿之助は再三使を毛利軍に遣し、勝久以下の助命を懇願したが、毛利氏はこれを峻拒した。鹿之助は今はせん方なく、勝久に自害

鹿之助新月に祈る
(小堀鞆音筆)

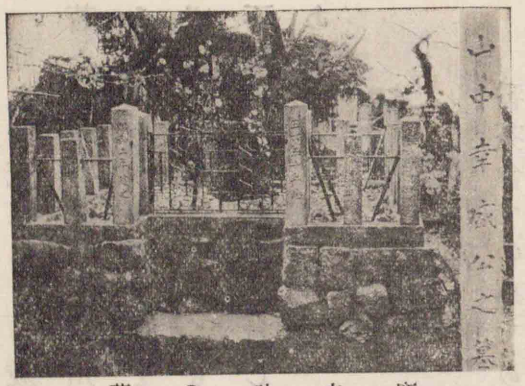
(一)兵庫縣佐用郡西庄村。

(二)秀吉等の軍。

を迫つた。勝久は金銀、太刀、鎧等を城中の主な人々に分ち與へ、七月三日泰然として死に就いた。上月城の陷落はその當日であつた。城内の將士數人は自害して衆命に代り、鹿之助は出でて毛利氏の軍門に伏した。

彼が尼子家再興の兵を擧げてから茲に至る前後十年、亡國の遺民を提げて、屢、毛利氏の大に頡頏した。その間、無援の孤城に立籠つて毛利氏の强攻を受けること三たび、一たび降を請ひ、二たび敵陣に降るに及んでも尚死を望まず、幾たびか死地に臨んで生を求めて已まなかつた。而して彼は三たび毛利氏に降つた。しかも尼子氏の宗族悉く亡び、同志は共に或は死し或は散つた時、何を以て彼は捕虜の汚名に甘んじたか。さはれ彼が後半生の哀史は、悉く堅忍不拔、斃れて後已むの概がある。彼は畢竟するに奮鬪の人であつた。彼は必ずや窮餘の一策を抱いて、最後の最後まで奮鬪を志したに相

違ない。敗滅を自ら覺悟して、彼は孤忠をたて貫いた。華やかな武士道を以て彼を律するのは當らない。その苦節十年の後半生は、亡國の悲愁に泣く尼子の家臣として、宿敵毛利氏に會心の報復はよし成らずとも、徹底的對抗の一途を希つたのではないか。



鹿之助の墓

彼の最後はまた哀れにも傷ましいものであつた。彼は七月十日上月城麓を發足して、幽囚の身を防州に送られる事となつた。その途中高梁川(一)の合(二)の渡にさしかゝるや、尾花戰ぐ堤に涼を貪るも束の間、毛利氏の刺客河村新左衞門の一太刀に傷つき、福間彦右衞門の兇刃にあへなくも仆れた。あはれ山陰の麒麟と謳はれた身も、その末路は誠に蕭々たるものであつた。鹿之

(一)岡山縣の西部を北から南へ流れる川。
(二)高梁川と成羽川との落合ふ所にある渡場。

助時に年三十四、雄圖空しく中道に斷たれて、あたら男盛りの時に散つた。

鹿之助死してより歳華流れて三百五十有餘、今雲州の山は徒に蒼々の裝を凝し、高梁川の水は滔々の音を立てて千古の恨を傳へるが、一たび山陰の地を踏んで、彼が孤忠百戰の山河を涉る者あらば、感慨蓋し無量なるものあるべく、その生涯を通じて遺した百折不撓の人生教訓に對しては、また無限の敬慕を禁じ得ないものがあるであらう。

(一)小説家、文學博士。名は成行。慶應三年(一八六七年)江戸に生れた。

自修文

清正公と紀文大盡

幸田露伴(一)

番茶會での事である。柳井君の談が濟んで、一同は少時沈默してゐたが、檜隈君は多勢に促されて少し笑ひながら、

「それでは、僕は一問題を提出して、諸君の談話の種子としよう。」

と言つて、徐にその重い口を開いた。人々はこの人何を語り出すかと、樂しんで耳をそばだてた。

檜隈君は急がず慌てず語り出した、

「諸君。僕は一つの疑問を諸君に提出しようと思ふ。僕は、この間清正公卽ち加藤清正公の事を書いた物を讀んで見たが、その中に僕をして感ぜしめ、また僕をして疑はしめた事があつたのだ。それは何かと言ふと、かういふ事なのである。清正公が既に大名に成り得た後の事であるが、一日その臣下等に閑話をなされたをり、『余は民間の一賤夫より身を起し、太閤殿下の御知遇を蒙つて、今日あるを致し得たが、よく余を知らぬ者は、これを以て仕合せが好き故とのみ思ふであらう。しかし、余は今にもあれ、家隷郎等もなく、朋友もなく、家財器物も何ももたぬ素裸な下帶一つの身となつても、我が器量だけの事をばし出し得ると思ふ。』と物語られたので、臣下等が『いかに勇武の我が君でも、下帶一つの身と

(一)桃山時代の武將。尾張の人。熊本の城主。慶長十六年(一二二七一年)歿、年五十。

閑話　むだばなし。
知遇　人から自分の才能がみとめられて優待されること。
家隷　家に使ふ者。けにん。家奴。
郎等　武家の家臣。けらい。
器量　物事の役に立つべき才能。

なり給ひては、如何ともせん方なく、困じ果て給ふべし。』といふかり問うた所『いや、全く余は一時の座興に虚言詐瞞を言うたのではない。』と答へられた。そこで『それならばいかにか爲し給ふ。』と、畏る詰り氣味に尋ねると、『さればである。若しも全くの素裸にて、どこかに抛り出されたものとすれば、余は先づ風呂屋を見出して、その許に入立たんと思ふなり。いづくいかなる所にも、人里ある以上は風呂屋なき事なければ、風呂屋に立寄りて、とかくの詮議もなく、先づその風呂屋の爲に、或は水を汲み、或は薪を運び、またはうち割り、或は風呂場の流しを洗ひ、桶を洗ふといふ樣に、何くれとなく目に當りたる用事を爲しやるべし。風呂屋なんどにての事なれば、素裸も苦しからず、働けば身内の溫熱も起りて徒居よりはましなり。またさする時は、たとひ召抱へて奉公人と爲さゞるまでも、一飯をくれざる程の事はあるべからず。ましてこの方の望を少くし、働を宜しくし、正直に陰陽なくうちふるまは

座興　一時のたはむれ。ちよつとのざれごと。
畏る詰り　おそれながら。びくくしながら。詰り氣味にせめ問ふ樣に。
とかくの詮議もなく　あれこれのとりしらべもなく。
何くれとなく　これと定めた事もなく。何やかや。
徒居　何もせずにゐること。
陰陽なし　場合によつて行を異にしないこと。裏表なし。

んには、人を使ふ者は常に宜しき人を使はんと思ひ居るもの故、召抱へずといふ事あるべからず。唯此方の心掛だに宜しく、働さへかひ〳〵しければ、おのづと飯を食ふ程の途は開くべし。さて試みに使はるゝにせよ、身を寄する所を得れば、二三日は素裸にてもあるべし、三四日も過ぎて忠實なる心ざまを見知られんには、いかに吝き主人にても、古單衣の破れ果てたる物一つくらゐはくれざる事あるべからず。既に身を被ふ物をだに得ば、またいかやうにも主取を爲すを得べく、次第々々に身を立てて、奉公人一人前として差づかしからぬ衣服を得れば、少々の給金なりとも積貯へ、奈良刀の脇差一本を買取るべし。この奈良刀の一本を買取る所までは辛苦一方ならざるべけれども、脇差一本を我が手に入るゝ事を得たらんには、それより後は男兒一人なり、腕骨次第に我が運を切開いて、雜兵より端侍、それよりして百貫千貫の身ともなり、天の冥加にさへかなはゞ、遂に一國一城の主とも

かひ〳〵し　まめやかなこと。かげひなたがないこと。
心ざま　こゝろだて。こゝろがら。
主取　召抱へられてけらいとなること。
奈良刀　奈良に住む刀工のうつた刀。
雜兵　卑しい歩卒。
端侍　さむらひのはしくれ。

なるべし。』と語られたので、一同夢の覺めたるが如く、『いかにも御道理にして、世の實際に外れぬ御話なり。』と感服したといふ事である。

僕の今饒舌つた言葉と本文とは違ふかも知れぬが、さういふ意味の事が書いてあつたのだ。所で、僕の疑ふといふのは、其所の段であつて、その清正公の談は非常に好い教訓であるとは感ずるが、さてそれを單に書物の上の事のみとしないで、直ちにこれを我輩等の身の上に引移して見ると、昔と今との差はあるに相違ないが、どうも合點の行きかねる所がある。と言ふのは、今すぐに僕が素裸で飛出したとすれば、さう清正公の樣に、立身する徑路が分明には見えて來ないからね。諸君はどう思ふか知らないが、實際清正公の言は、徹底してゐる好い言の樣にも思へるが、しかし、僕等の今の身に當てはめると、不都合を免れない。素裸でないまでも、著のみ著のまゝで出たのでは、僕にはどうも世に立つ

出來ない相談無理の話。

て行く事が出來る樣な氣はせぬから、これは時勢の差で、出來ない相談なのかとも思ふ。諸君のうち、誰かこの清正公の言葉の樣な事を、今日の世態でも爲し得ると思ふ人がありますか。誰か清正公の樣に身を立つる徑路を分明に見得て居る人がありますか。」と言つた。

この「清正公の樣に能く爲し得る者があるか。」との問には、皆沈默させられてしまつた。敢へて能く爲し得るといふ事は誰にもちよつと出來難いからである。しかし松山君は、默り通しはしなかつた。

「それは君、僕等は今すぐと立派な答は出來ないさ。けれども僕が思ふには、それは清正公の言に無理があるのではなくて、僕等が實は清正公だけ偉くないから、それで答を見出し得ないのだらうと思ふ。何も戰亂の世と治平の世との時勢の差によつてのみ難易があるといふのではあるまいよ。それに就いては、僕にも

思ひ出した話があるが、これは治平の世の事である。かの有名な紀國屋文左衛門(一)に向つて、或男がたび〳〵無心を言ひこんだのである。紀文はそのたび毎に快く金子を與へたが、餘りたび〳〵なので、終には與へる事を肯んじないで、『お前は商賣の資本々々といふからたび〳〵貸して進ぜたが、何時になつてもその商賣の成立たないのは困つた人である。手腕のある者ならば、四文の錢からでも取附けると言傳へてゐるではないか。今此所に四文あるから、これをお前に進げるであらう。これで取附いて立派な商人になられるが宜しい。』と言つたといふ事である。するとその男が顔を膨して、『四文ではどうする事も出來ませぬ。お前さんでもし方がありますまい。さあどうすれば宜しいのです。』と詰り問うた。その時、紀文は笑つて、『それなら教へてあげようが、その四文で先づ飴を買ひなさい。そしてその飴を桶屋の子供にやつて、巧く機嫌を取つて、そして竹の屑をもらひ、小刀を借り、斯樣々々い

(一)江戸時代の富豪。紀伊の人。世に紀文大盡といふ。享保十九年(一七三四)歿、年六十六。

取附く　職業を得る。

ふ物を造つて、子供に賣るがよい。』と教へた。それが簡易飛行機とでもいふべき、かの竹蜻蛉といふ玩具だといふ事で、この忠告に從ひ、その男は竹蜻蛉から取附いて、それから米俵のさんだらぼふしを買つてさしを作り、すさを造り、零米を集め、次第々々に廢物利用に著眼して、うなぎのぼりに身代をこしらへたといふ事を聞いてゐる。だから、僕等も紀文の樣に智慧があれば、治平の世の今日でも、清正公の樣に出世が出來るに相違ないと思ふ。どうだらう諸君、僕の說は間違つてはゐまい。』と言つた。

―番茶會談―

さんだらぼふし　米俵の兩端に當てる圓くて平たい藁のふた。

さし(錢緡)　藁を細くなつて、錢の穴にさし通し束ねるもの。ぜにさし。

すさ(寸莎)　壁土に雜ぜて塗り、龜裂を防ぐもの。刻んだ藁、麻、紙などを用ひる。

うなぎのぼり　うなぎがさかのぼる樣に、次第々々に上に進むこと。

(一)正平二年(一三〇七年)八月の河內國(大阪府)藤井寺の合戰、同じく十一月の攝津國(大阪府)住吉阿倍野の合戰。

(二)足利勢。

一五　最後の參內

さても今年兩度の合戰に、京勢(二)むげにうち負けて、畿內多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍(三)、左兵衞督(四)の周章、唯熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢なん

(一)山城國久世郡にある。(今の京都府淀町)
(二)同國綴喜郡。(今の京都府八幡町)
(三)藤原氏。吉野朝の忠臣。男山で戰死した。
(四)第九十六代後醍醐天皇。

(三)足利尊氏。
(四)弟直義。

どを向けては、かなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中國、東山、東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀(一)、八幡(二)に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時一族うち連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、(三)四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成、尫弱の身を以て大敵の威を碎き、(四)先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にて討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戰の場へは伴なはで河內へ歸し、「死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に卽け參らせよ。」と申し置きて死して候。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。このたび我と手を碎き合戰仕り候はずば、且は亡父の申しゝ遺言

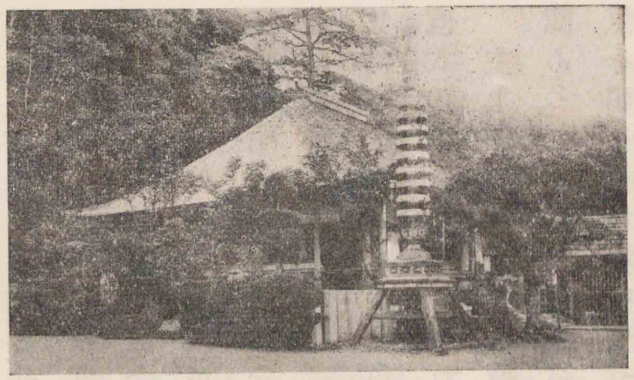
有待の身
傳奏
(一)第九十七代後村上天皇。

にたがひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、唯君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、このたび師直、師泰に駈合ひ、身命を盡し合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行、正時が首を彼等に取られ候か、その二つのうちに戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に、參內仕つて候。」と申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色に現れければ、傳奏未だ奏せざる前に、先づ直衣の袖をぞぬらされける。

主上(一)乃ち南殿の御簾を高く卷かせて、龍顏殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つ事を得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮先づ憤を慰する條、累代の武功返す〳〵も神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰、天下の安否たるべ

敕答

し。進退度に當り、變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰手を下すべきにあらずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの敕答に及ばず、唯これを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。



如意輪堂

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衞、同紀六左衞門子息二人、野田四郎子息二人、楠木將監以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書列ねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる。

と一首の歌を書留め、逆修の爲と思しくて、各鬢髮を切つて佛殿に投入れ、その日吉野をうち出でて、敵陣へとぞ向ひける。

——太平記——

逆修

一六　樹の根

和辻哲郎(一)

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、長い馴染である松の樹の全體である樣な氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとり

(一)哲學者。東京帝國大學教授。兵庫縣の人。明治二十二年生。

と落著いた潤ひのある鮮さを見せる。綠の葉は涙にぬれた樣なしをらしい色艶を增してくる。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝の樣な爽かな氣分が樹の色や光のうちに漂うて、いかにも朗かな生の喜が其所に躍つてゐる樣に感じられる。をり節かはいゝ小鳥の群が生々した聲で囀り交して、綠の葉の間を樂しさうに往き來する。――それが私の親しい松の樹であつた。

然るに或時、私は松の樹の生育つた小高い砂山を崩してゐる所に佇んで、砂の中にくひこんだ複雜な根を見まもる事が出來た。地上と地下との姿が、何とひどく相違してゐる事だらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、――それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力を盡した樣に、枝から枝と分れて、亂れた女の髮の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱附いて

ゐる。私はこの樣な根が地下にある事を知つてはゐた。しかし、それを目の前にまざ〳〵と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は長い馴染の間に、この樣な地下の苦しみが不斷に彼等にある事を、一度も自分の心臟で感じた事がなかつたのである。彼の苦しみの聲を聞いたのは、時をりに吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いた後であつた。しかし、その叫聲や、萎れた顏も、その機會さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に返つて、苦しみの痕をめつたにあとへ遺さない。しかも彼等は、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つた事がないのであつた。あの美しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこの樣な苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親し

みを感ずる樣になつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思はれなかつた。

成長を欲する者は先づ根を確かにおろさなくてはならぬ。上に伸びる事をのみ欲するな。先づ下にくひいる事に努めよ。早年にして成長の止る人がある。根をおろそかにしたからである。四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ人がある。下にくひいる事に沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と、感激の强い心臟と、よく立つ筆とをもちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は今生きる事の苦しさに壓倒されて、自分の樣な者は生きる値打もないとさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どの樣な飛躍が彼の上に起るか。――私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から貧弱な果實が生れるはずはない。

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に彼等の仕事は、味へば味はふ程深い味を示してくる。

現代には、たとひ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともするとそれが小さい植木鉢の中の仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出來るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてが餘りに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸す事が出來ない。

天を突かうとする樣な大きな願望は、いぢけた根からは生れるはずがない。

偉大な物に對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬である事を考へて見なければならぬ。

——偶像再興——

一七　明倫歌集より

世をさまり民安かれと祈るこそ　わが身につきぬ思なりけれ。　後醍醐天皇

すべらぎの神のみことをうけ來つゝ　いやつぎ〳〵に世を思ふかな。　亀山天皇(一)

白がねもこがねも玉も何せんに　まされる寶子にしかめやも。　山上憶良

(一)第九十代。

(一)平安時代の歌人。承平三年(一五九三年)歿、年五十七。

(二)第六十代醍醐天皇頃の歌人。

(三)第百十三代東山天皇に仕へて右大臣攝政となつた。

ひとの親の心は闇にあらねども　子を思ふ道にまどひぬるかな。　藤原兼輔(一)

秋の日は山の端ちかし暮れぬ間に　はゝに見えなんあゆめわが駒。　大江千里(二)

咲く花の梢を見ても思ひ出づる　つらなる枝の枯れし名殘を。　九條道房(三)

埋火のあたりのどかにはらからの　まどゐせし世ぞこひしかりける。　松平定信

まどゐ　藤原兼輔

あたらしき年の始のうれしきは
　ふるき人どちあへるなりけり。　平兼盛(一)

世の中にうれしきものは思ふどち
　はな見てくらす心なりけり。　平宣長(二)

あめのした國はおほけどかむろぎの
　うみましませるおほやしまぐに。　橘千蔭(三)

天の原よさしまつれる日の御神
　てらさんかぎり國はうごかじ。

(一)平安時代の歌人。正暦元年(一六五〇年)歿した。
(二)本居宣長。かむろぎ
(三)加藤千蔭。江戸時代の國學者。芳宜園と號した。江戸の人。(文化五年、一八四〇年)歿、年七十四。よさしまつる

一八　やまと歌

和歌は素戔嗚尊の古風より起りて、久しく秋津洲の習俗たり。三十一文字の麗篇をもて、數千萬端の心緒を舒ぶ。「古今」の序に言へるが如く、人の心を種として、萬づの言の葉とぞなりにける。これによりて、神明佛陀も棄て給はず、明王賢臣も必ず賞し給ふ。春の花の下、秋の月の前、これをもて豫遊の媒とし、これをもて賞樂の友とす。

長保三年正月晦日、殿上人船岡にて花を見るに、齋院の選子より柳の枝を賜はせけり。人々これを見ければ、「絲のもとには。」と書かれたりけり。ごと人その意を知らざりけるに、雅通たま〳〵古歌の一句を悟りて返事を奉りけるにこそ、人々の色もなほりにけれ。紙のなかりければ、直衣を破りて書きはべりける、

散りぬべき花をのみこそたづねつれ
　おもひもよらず青柳のいと。

保元の亂によりて、新院、讃岐の國に遷らせおはしましけり。和歌

(一)第六十六代一條天皇の御代。(一六六一年)
(二)今の京都市上京區大宮。
(三)村上天皇の皇女。和歌に巧であつた。
(四)平安時代の歌人。久我内大臣とも堀川右大臣とも呼んだ。
(五)「花見には群れて行けども青柳の、絲のもとにはくる人もなし。」(拾遺集、よみ人知らず)
(六)「玉葉集」には第三句は「見に來つれ」とある。
(七)第七十五代崇德上皇。

の道すぐれさせ給ひたりしに、かゝる憂き事出で來たれば、この道すたれぬべしと悲しくおぼえて、(一)寂念法師が許へ詠みて遣しける、

西行法師、

言の葉のなさけ絶えぬるをりふしに
ありあふ身こそかなしかりけれ。

かへし寂念法師、

しきしまや絶えぬる道もなく〳〵も
君とのみこそ跡をしのばめ。

(二)嘉應二年十月九日、(三)道因法師人々に勸めて住吉の社にて歌合しけるに、後德大寺左大臣、前大納言にておはしけるが、この歌をよみ給ふとて、「社頭月」といふ事を、

古りにける松ものいはば問ひてまし
むかしもかくやすみのえの月。

(一)歌人。俗名藤原爲業。崇德天皇の朝に藏人に補せられ、皇太后宮大進となつた。後、剃髮して大原山に隱れた。

(二)第八十代高倉天皇の御代。(一八三〇年)

(三)歌人。俗名藤原敦頼。崇德天皇の朝に馬寮使として仕へた。

かくなん詠み給ひけるを、判者俊成卿殊に感じけり。世の人々も褒めの、しりける程に、その頃、かの家の領、筑紫瀨(一)高の莊の年貢積みたりける船、攝津の國に入らんとしける時、惡風に逢ひて、既に入海せんとしけるに、いづくよりか來りけん、翁一人出で來りて、漕直して、別事なかりけり。船人怪しみ思ふ程に、翁の言ひけるは、「松ものいはばの御句、面白う候ひて、この邊に住みはべる翁の參りつると申せ。」と言ひて失せにけり。住吉大明神のかの歌を感ぜさせ給ひて、御體を現し給ひけるにや。

（「古今著聞集」に據る）

一九　人臣の道

北畠親房(二)

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡を憐みて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申す

(一)福岡縣（筑後國）山門郡瀨高町。

(二)吉野朝の忠臣。正平九年（一三〇四年）歿、年六十三。

きほひ爭ふ

前車の轍

(一)第七十四代。

制符

語らはる

べきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望を致す事、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見る事は、誠に有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

(一)鳥羽院の御代には、「諸國の武士の源平の家に屬する事を停むべし。」といふ制符たび〳〵ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徵し具しけるに、近代となりて、やがて語らはるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。

この頃の諺には、ひとたび軍に駈合ひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、「我が功におきては日本國を賜へ。」若しは、「半國を賜

言語は君子の樞機

堅き氷は霜を履むより至る

はりても足るべからず。」などぞ申すめる。誠にさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るゝ端ともなり、また朝威の輕々しさも推量らるゝものなり。「言語は君子の樞機なり。」と言へり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕る事はあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣、賊子といふ者は、その初め心言葉を愼まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の惡しくなり行くを末世とは言へるにや。

北畠親房

——神皇正統記——

准后

二〇　我が國體と萬世一系の信條

准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこの事あり。異朝にはその類なし。この故に神國と言ふなり。」とある通り、天照大神以來萬世一系の天皇を上に戴いてゐる我が大日本帝國が、寶祚と國運と天壤無窮であり、其所に國民の榮がある事は、我が日本に生れた者の誰も心に思ひ、口にしてゐる所であるけれども、さてどうして我が日本が神の國として今日まで數千年の間傳はり、尙將來もこの數千年間傳はつて來た言ふべからざる一つの力を以て進んで行くかといふ事は、建國以來の歷史を味はひ、さうして茲に皇室と國民との關係を知り、それに依つて我が國體がいかに自然に發達して來たかを知らなければ、了解する事が出來ないのである。

信條

環境

尤も從來傳はつてゐる日本の太古から上代の歷史が、そのまゝすべて正確であるとは固より考へる事は出來ない。しかし、その中に含まれてゐる神話或は傳說の起原、及びその發達して來た途をたどつて見て、その神話、傳說が萬世一系なる歷史的事實を基礎として起つてゐるものと考へ得られぬであらうか。また我が日本の上代の神話傳說のうちに、この萬世一系といふ信條が生き〳〵としてあるのは何故であらうか。この意味に於て、我々は從來の傳說に囚はれた行き方でなく、寧ろ今日の文化史的研究の上に、萬世一系の事實であるか否かを研究して見なければならぬと思ふ。

これに就いての研究は、先づ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふ事を、地理的にも、生活狀態の上からも考へねばならぬ。その關係が我が日本にはい

相互依存

かに現れてゐるか。いかに日本の國家が現れ、日本の社會が現れて來たかを觀察して見ねばならぬ。先づ我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとでは、その社會的集團の進みが異なつてゐる。我が國の如き島國や山國では、先づ限られた地方で社會的集團が起るから、他の民族との接觸が餘程遲れる。隨つてその社會には生存競爭といふ事よりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分がより多くその社會に現れたであらうと思はれる。まだ原始的の社會であつて、唯自分等の目に觸れる範圍が世界の全體であると考へて居つた時代に於ては、若し我々の祖先の起つた所が四方山で圍まれ、或は山若しくは海で圍まれた高天原または日高見國といふものであつたとすれば、その狹い小さな世界で一つの社會的集團を作つて行くには、餘程平和的であつて、かの强者が弱者を苦しめる樣な意味はなかつたらうと思ふ。その社會を平和的に作り上げる事に進んで行かなければ、その社會は滅亡となるのである。この事は社會の一つの細胞とも言ふべき家庭の組織に就いても考へ得る事である。隨つて家庭の組織される本となつてゐる夫婦の成婚にも、日本の上代の社會に於ては、近親結婚で社會を作り出してゐた事は、神話、傳說の中によく現れてゐる。さういふ風で出來た家庭は、夫婦、親子の關係は極めて親密であつて、隨つて平和な愛を以て結ばれた社會が茲に成立つて來た事を信じ得る色々な條件が、日本の社會の發達の上に備つてゐる。

さてこの平和な社會のだん〳〵發達する具合を見ると、一番初には、別に專門的の職業が各家々にあつたものではなかつたらしい。それがだん〳〵進んで來た時に於て、その社會の成立、その國民生活に必要な精神的や物質的の分業が、自然に行はれて來たもの

であらう。さうしてその家々の名前は、最初は職業の名前を以て家の名稱とする事に進んで行つたものである。中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱は職業の名稱であるが、それで一つの家の名前が出來てゐるのである。この場合に、それがまた國家的組織と一致してゐるのが、卽ちまた我が國上古の氏族制度で、特殊な職業がなくて國家の最高地位を占められる家は、唯一軒しかないのであるから、別に家の名稱を呼ばぬ。隨つてこれを作る必要がなく、唯尊稱だけを作ればよろしい。今もお上とか、上樣とか、陛下とか申し上げれば、天皇陛下の御事である樣に、大昔から我が皇室には御家名といふ者がない。唯親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮樣と申すのみである。天皇陛下には「すめらみこと」卽ち我々を統べてをられる御方といふ樣な意味の尊稱はあるが、それ以上に、特別に皇室として御名前を附して、かういふ御家の誰といふ必要はないのである。

革命

國民的自覺

主權者の家に名稱を持つてゐない國は、世界中今日に於て唯我が大日本帝國あるのみである。いかなる國でも、日本以外の國では皆主權者の家名がある。これは要するに、もと國民の一部であつた者が、後に勢力を得て主權者となつたのであるからである。日本の皇室はこの點に於て、社會發達の最初から主權者として今日まで繼續された事を、事實の上に於て示すもので、實に世界に類例のない萬世一系を、この事實の上に證明してゐるのである。若し日本に何れの時代にか革命が行はれたものとすれば、現主權者には必ず家の名前がなければならぬはずである。

以上の所說によつて、皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神敕の、實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根原となつてゐる根本義が了解されるであらう。さうして我々がこの建國の昔に

(一)第二十五代。
(二)百濟の暴君。
(三)第十六代。

遡つて祖先の偉業を回顧する時に、我々は國民としての信仰に生きる。我々はその信仰を益養成して行かねばならぬ。即ち歷代天皇は萬世一系を事實に於て永久に傳へる事に御努力あり、我々日本國民はその意味に於て皇室を御助け申す事に於て努力があり、茲に始めて日本民族として進んで來た意義が現れるのである。さうして前に述べた日本最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を推擴げたものが、この皇室と國民との關係となつたので、一に歷代天皇が、義は君臣であるが親しみは父子の樣な大御心で國民に君臨され、隨つて神武天皇から今日まで連綿として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を虐げられた御方が御出でにならぬといふ美しい歷史となつて現れてゐるのである。武烈天皇(一)の御事蹟として日本書紀にあるのには、朝鮮末多王(二)の事蹟が混入してゐる事は、早く學者の定說となつてゐる。さうして仁德天皇(三)が

(一)第百五代。
供御
式微
扶翼す

民家の煙を御覽になつての御聖德も、醍醐天皇が寒夜に御衣を脫がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が、仁德天皇や醍醐天皇の御聖德の上に現れてゐるので、仁德天皇、醍醐天皇のみが聖德の天皇であらせられたといふのではない。後奈良天皇(一)がその日の供御にも御困りになつてゐる程皇室の衰微した時代にも、尙宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとせられた事は、この皇室の式微から二たび盛な皇運の光がさして來た所以である。隨つて我々日本臣民は、皇室の爲に身命を捧げて御奉公をするといふ考の上に立つて、始めてこの萬世一系の皇運を扶翼し奉る事が出來るのである。

神皇正統記にも「窮りあるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけ給ふ皇になんおはします。」と言つてあり、また「凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の

中核

(一)motto.(標語)

道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵まし、その跡を憐みて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ爭ひ申すべきにはあらぬにや。」と述べてあるのは、親房がいかによく日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべきモットー(一)であらねばならぬ。

我々は、皇室の繁榮は同時に日本國の榮であり、日本國の幸福と一致する皇室の繁榮であるといふ事でなければ、建國の大精神と矛盾するものと考へねばならぬ。また其所に始めて天照大神の神敕の意味が強く現れて、日本の國運と民福とが進んでくるのである。卽ち我々は外來の文化に對して、我が皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきである。皇室及び國體を忘れて、唯外來の文化に心醉して、國民的自覺を失ふ事があつたら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。我々日本國民は永劫に

(一)歷史家、文學博士。東京帝國大學敎授。長崎縣の人。明治七年生。
(二)哲學者、文學博士。東京帝國大學敎授。茨城縣の人。明治八年生。
大宗家　大本家。總本家。
焦點　物理學上の語で、光線または熱の一點に集る點。轉じて集注する所の意。
(三)第二十一代。
(四)日本書紀第十四卷にある。
至懇至到　この上もなくねんごろで、この上もなくゆきとゞいてゐる。

この大信條の下に進まねばならぬ。

(黑板勝美の文に據る)

自修文

君民一家

深作安文(二)

我が國では、皇室は國民全體の大宗家にまし〳〵、人民はその末流を辱うしてゐるので、皇室は一般人民の尊崇の焦點となり、以て今日に及んだのであつて、これを君臣一家といふ。

されば我が國では、君主と人民との關係は、君臣たると同時に父子であつて、御歷代の天皇の、何れも深く人民を愛撫し給うた事は、恰も慈母の赤子に於けるが如く、人民が君主を仰慕し奉つた事は、猶赤子の慈母に於けるが如くである。雄略天皇(三)の御遺詔(四)の中に、「義ハ乃チ君臣、情ハ父子ヲ兼ヌ。」とあるが、至懇至到な聖旨の程、實に感激に堪へない。けれども斯樣な事は、獨り雄略天皇ばかりでなく、列聖の御志であらせられた事と拜察される。大正天皇の御卽位禮の敕語の中に、

大御寶　天皇が寶として愛撫し給ふ意。
蒼生　人民が無限にこの世に生れるのは、草が蒼々と地上に生ずるのと同じといふ意から出た語。
天の益人　天つ神の惠で生者が死者より日々に益してゆく意。
輕々に　かろ〳〵しく。
下剋上　下の者が上の者を凌ぎをかすこと。

爾臣民世々相繼キ、忠實、公ニ奉ス。義ハ則チ君臣ニシテ、情ハ猶ホ父子ノコトク、以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ。

と宣はせられたのに依つても知るべきである。神代の古より、人民に大御寶、蒼生、天の益人などの名稱があり、民族が古來殆ど理想的の統一を保ち、未だ一たびも分裂を生ずる事のなかつたのは、全くこれが爲である。

「君臣卽父子。」これ我が國體を研究する者の、どうしても輕々に看過すまじき事實である。故に治者、被治者といふ樣な形式的名詞では、我が君臣の關係を言表す事が出來ず、父子といふ自然的名詞で、始めて能くこれを言表す事が出來るのである。されば、君臣の分は初から明らかであつて、臣に下剋上の行爲なく、君に暴逆の御ふるまひがない。皇室の御仁慈は子に對する父の至情に基づき、臣民の忠誠は父に對する子の至情に發し、至情を以て至情に對するので、上下透徹して、少しの曇をも留めないのである。

大家長　大なる家のあるじ。
忠孝兩全　忠孝ふたつながらまつたいこと。忠と孝とのどちらをも失はないこと。

既に君臣一家であり、また君臣卽父子である。是に於てか、忠と孝とは左の意義に於て相一致する。

(一)我が國では、國と家との差は、單に規模の大小に過ぎず、國を縮小すれば家となり、家を擴大すれば國となる。否、國はやがて大なる家である。故に、君主としての天皇に對し奉る忠は、大家長としての天皇に對し奉る孝である。

(二)我等の歷代の祖先は、列聖に對して忠を盡し奉つた者であるから、今日我等が天皇陛下に對して忠を盡し奉るのは、祖先の志を成す所以で、取りも直さず、祖先に對する孝である。卽ち忠孝兩全であるのである。

(三)孝は子たる者が誠を致してその親に仕へる事を言ひ、忠は臣たる者が誠を致してその君に仕へ奉る事を言ふのである。されば、誠たる點は兩者全く同一で、親に對する孝を以て君に仕へ奉れば則ち忠となり、君に對し奉る忠を以て親に仕へれば則ち

一誠　ひとつのまこと。

渾然　差別のないさま。

(一)孟子滕文公上篇にある。

孝となるのである。

(四)人の子たる者が、家にあつて誠を以て親に仕へれば孝となり、國にあつて誠を以て君に仕へ奉れば忠となる。卽ち我には單に一誠あるのみで、唯その所を異にし、範圍を異にするので孝となり、忠となるのである。

世界何れの所にも家のないのはなく、何れの所にも國のないのはない。家ある所、孝を以て子たる者の道としないのはなく、國ある所、また忠を以て臣たる者の道としないのはない。それ故、忠孝は人といふ人に通ずる大道であつて、決して我が民族にのみ存する者ではない。唯他國にあつては、忠と孝とは分離して存在し、我が國に於ける樣に、渾然として合一しないのである。特に支那では、忠よりも孝を重んずるばかりでなく、その忠は「君臣有(一)義。」と言つて、餘程形式的の者である。臣たる者が、その君を諫めて若し聽かれなかつたならば、去つてよい場合があるのである。然るに我が國では、孝よりも忠を重んじ、よしや君は君たらずとも、臣は臣たらねばならないのである。故(一)元田東野翁が、

(一)名は永孚。熊本縣の人。樞密顧問官。明治二十三年歿、年七十四。

所在　何所にあつても。

人臣の道、進んで喜ばず、退いて怨みず、貴なく、賤なく、大なく小なく、所在當に忠を致すべし。

と言つたのは、卽ちこれである。

要するに、我が國の忠は孝に一致する忠であり、孝は忠に一致する孝である。それ故、嚴密に言へば、我が國に於ける忠と孝とは、支那の忠孝といふ文字では、十分に言表す事が出來ないのである。これ我が國の忠と孝とが、他國のそれ等と到底同一視する事の出來ない所以であつて、實に忠孝一致、若しくは忠孝一本は、我が國民道德の特色中の特色である。

——國民道德要義——

二一　春の樂しみ

貝原益軒(二)

春は先づ一夜の程に、あらたまの年立返る朝の空の光、心づから

(二)江戸時代の儒者、博物學者。筑前の人。正德四年(一七一四年)歿、年八十五。

心づから

つとめて

四つの始

はだれ

(一)「花ならで身にしむものは鶯のかたらぬ聲のにほひなりけり。」(風雅集、道因法師)

にや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて、貧しき家にも春盤などいふ物を設く。また土器取出で、大御酒進めて、先づつとめて父母にことぶきし、次に自ら祝し、賓客にもてなす樣など常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。時は今は四つの始なれば、空の景色やう〳〵ひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山邊に霞の薄くたな引ける、さま〴〵にものけざやかに見えて、冬の空に立變れる裝、先づ春の來れるしるしあらはなり。垣根隱れに冬より殘れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名殘を惜しむべし。待ちわびし梅の匂百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の、春を迎へてもの若き聲、初春の初音の今日に逢へる、耳とまりてこひしく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むはこれ先づ春の賜なり。これを始として、尙行くさき遙かに榮ゆる春の豐かなる惠たのもし。千年も經べき綠の松も、今一入の色を增して、常に見馴れしもいや珍しくなづさはれぬ。韓文公が「最是一年春好處。」と言へりしは、早春のけしき、一年のうちにて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。

如月の程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたる裝、殊に曙の景色譬ふべき物なくあはれむべし。古の人「春は曙。」と言ひけんも宜なるかな。日の光藪しわかねば、數ならぬ垣根の內も、冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顏色を生じ、花待ち顏になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人の業も古年より暇ありていそがはしからず。日永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗かに霞みわたりたる景色、いと遙けし。夕づけて日は既に入りぬれど、殘れる光尙久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は陽氣の昇るけにや、童ども紙鳶といふ物を造り、長き絲つけ、風に任せて放てば、

なづさふ

(一)韓愈のこと。唐の文豪。字は退之。文公は諡。長慶四年(西紀八二四年)歿、年五十七。

(二)清少納言。

(三)「日の光藪しわかねばいそのかみふりにし里に花も咲きけり。」(古今集、布留今道)

日永くして少年の如し

老いみいはけみ

消えがて

けおさる

(一)周代の哲學者。莊子。孟子と同時代。

(二)唐の詩人杜甫。同じく唐の詩人杜牧に對して老杜と稱せられる。

高く上り、雲の上まで遙けくたな引くを戯とすれば、老いみ、いはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野にはまた絲遊といふ物霞の如く地より立騰れり。またかげろふともいふ。莊周(一)はこれを野馬といふ。老杜(二)が詩に「落花遊絲白日靜(カナリ)」と言へるもこれならし。これ皆常にはなきものなるが、春めきていと珍し。また垣根の草早く萌出づるを見るにつけても、春の氣は下より昇るけぢめいと明らけし。花もやうやう咲續きて、梅花既にうつろひて後新たなるは、我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたな引く雲の面影に立つ心地す。李白きは消えがての雪の梢に殘れるかと見えて、いと麗し。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かして、えならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花(コヽヤ)(ハナ)は皆けおされぬ。されど日ごろ待たせ待たせてやう〳〵咲けるが、飽くまで見る程もなく疾く

(一)續古今集、藤原爲家の詠。

うしろめたし

散るはまた恨めし。

よしさらば散るまでは見じ山櫻(一)

花のさかりを面かげにして。

と古の人の詠みけんも、後の思出にせんとにや、情深し。このをりから春雨のしき〳〵降れば、我が宿の園の櫻はいかにあるらんとうしろめたし。柳翠に花紅にして、春の色を描き出せるは、いと麗しき眺なり。

春やう〳〵深くなれば、風やはらかに日暖に、百草芳を爭ひ、群花艶を競ふをりなれば、何れの所か春のなからんや。かゝる景色に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあくがれ歩き、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しき事のあるが中なるその一つなるべし。我が心の樂しみを知らざる人は、無賴の少年の閑を偸みて、そゞ

ろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきもこのをりなり。杜甫が詩に「(一)鶯聲暖正繁」と言ひ、(二)陳希夷が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆この時なり。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞする。花に坐し、月に醉ひて、二つながら兼ねたる樂しみ、(三)春宵一刻直千金。花有清香月有陰。といふ詩を思ひ出でられぬ。また「(四)惜花朝起早、愛月夜眠遲」と言へり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。また夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くる事おそきは、花を惜しまざるなり。この頃夕暮は遠き山邊の燒けぬるも、目立つべき見物なり。されば「(六)春風入燒痕」と言ひ、また「(七)野火燒不盡、春風吹又生」と言へるも、燒野の草を詠ぜしなり。古詩に「(八)池塘春草生」と言へりしは、この頃の眼前の景色を唯ありのまゝに言へるなるべし。

(一)「驚子春猶隔。鶯聲暖正繁。」
(二)宋の人。名は摶。希夷は號。太祖に仕へた。
(三)「春宵一刻直千金。花有清香月有陰。」
歌管樓臺聲寂寂。鞦韆院落夜沈沈。」蘇東坡)
(四)宋の人林希逸の詩句。
(五)「あたら夜の月と花とを同じくは、心しられん人に見せばや。」(後撰集、源信明)
(六)宋の人周弼の詩句。
(七)白居易の詩句。
(八)支那南北朝時代の詩人謝靈運が夢中に得たといふ詩句。

彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に飜るは、(一)井手の渡も見る心地して賑はしければ、目かれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、唯山茶のみ異花にかはりて盛久し。殊更つらをなして植ゑたる(二)つら〳〵椿、つら〳〵に見れども飽かず。階のもとの薔薇も夏を待ち顔なり。

すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遲く疾く咲續き、酴醿に至りて花の事終りぬるは、名殘惜しと見ゆ。春の花は何れとなく咲出づる色、殊に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるは怨めし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨もまたしげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とゞめあへぬ春の限りの今日の日の夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黃昏の時は、春の名殘いと惜しむべし。(四)蘇子瞻が「青雲還一夢」と言へる、うべなるかな。

——樂訓——

(一)京都府綴喜郡。山吹の名所。目かれせずながめがちなり。
(二)「巨勢山のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野を。」(萬葉集、阪門人足)
いどましく
(三)「惜しめども春の限りの今日の日の、夕暮にさへなりにけるかな。」(後撰集、よみ人知らず)
(四)宋の文豪蘇軾。號は東坡。子瞻はその字。徽宗の初年(西紀一一〇一年)歿、年六十六。

(一)詩人、評論家。名は昌治。新潟縣の人。明治十六年生。
(二)詩人、歌人。名は一。岩手縣の人。明治四十五年歿、年二十七。

○二二　縮むものに彈力あり

相馬御風(一)

故人石川啄木(二)の歌に、

ひと晩に咲かせて見んと梅の鉢を
火にあぶりしが咲かざりしかな。

といふのがある。この歌を時々私は思ひ出して口ずさむが、そのたびに、私は先づこの一首のうちに籠められた作者の皮肉な心持に、一種の輕い苦笑を誘はれるのである。しかし、その苦笑感は、忽ちにして作者その人に對する傷ましさの感じに變つて、私をして深い憂鬱にさへも陷れる事があるのである。

「何といふ傷ましい焦燥であらう。」

かう私の心が叫ぶと同時に、私は石川啄木その人の、あの晩年の苦悶生活の底知れぬ暗さを思ひやらずにはゐられないのである。

焦燥

花は咲くべき時に到らなければ決して咲かない。咲くべき內部の力が充實しきつた瞬間に達しなければ、花は決して咲きはしない。それを火にあぶつてまでも無理に咲かせようとして焦り狂つてゐるそのいらだゝしい心、それ程惱ましい心がまたとあらうか。

それに就いて思ひ出すのは、嘗て私が永い北國の冬籠のわびしさのうちにあつて、鉢植にして置いた雛菊の花の唯一輪開くのを見ただけの事によつて、限りなく大きな歡を與へられた事に就いてである。私はその時の經驗に就いて、當時次の樣な事を何かに書きつけたと記憶する。

「ほんのりと雪明りの射してゐる窓際の臺の上に置いた鉢植の雛菊が、漸く一輪だけ咲いた。いかにも軟かさうな綠の葉の間から、二寸程の莖を眞直に伸して、その上に白い小さな花が小首をかしげながら咲いてゐる。僅かにこの小さな一鉢の春の草を眺

めてゐるだけでも、私に取つては測り知る事の出來ない歡がある。花は無論部屋のぬくみがあればこそ咲いたのだ。しかし、またそれは單にぬくみだけで咲いたのではない。曇ガラスを透してくる光線も無論それに與つてゐる。けれども、花はやはり花それ自らの生命の力の充實を待つて始めて咲いたのだ。外からの力がいかに加つても、內なる生命の充實を得なければ花は咲かない。花の開くその最後の一瞬間の生命の充實、――それを私は始めてしみ〴〵と見入る事が出來た。僅かに一つの小さな鉢に植ゑられたこのさゝやかな生命ある者の働によつて、私の書齋全體がいかに活氣づけられた事か。

『花が咲いた。花が咲いた。』

子供たちまでが、この小さな一輪の花の咲いた事によつて、躍り上るばかりの歡を與へられたのである。」

私は今かうしたその時の私の氣持と、前に掲げた詩人啄木の歌に籠められた悲痛な心とを比べて、今更の樣に深く考へさせられるのである。

「縮むものに彈力あり。」――私たちはよくさうした言葉を耳にする。そしてそれによつて、何時も深く自らの警められてゐるのを覺える。だが、私がそれを儼然たる一箇の事實として私の心眼に見せられたのは、前述の私の經驗によつてであつた。

固く結んだあの小さな花のつぼみのうちに籠められた偉大な生命の力、――それを感じさせられたあの瞬間の私の感激は、全く何と言つて見樣もなく尊いものであつた。外に向つて花と開く力は、實に內に向つて貯へられる。籠められるだけ貯へられ、籠められた力の極致である。堅い地面を破つて小さな者の種の芽の伸びる力。厚い殼を破つて卵の中から禽鳥の生れ出る力。何れもこれ

決して外に出ようとのみ焦りたつた力ではなくして、内に籠められるだけ籠つた力の自らなる爆發に外ならぬ。

縮まるだけ縮んだもののうちに充實しきつた力こそ、この世にあつての最も偉大な力ではないか。そんな事を私は同時に考へさせられたのであつた。

以前から私は相撲を見る事が好きであつた。しかし、相撲を見てゐて私の最も壯快に感ずるのは、二箇の人物の鬪つてゐる狀態や、また勝負如何であるよりも、二人の力士が互に睨み合つたあの瞬間の緊張味である。土俵の眞中で二人の力士の睨み合つた瞬間に於ける肉體の緊張程美しい人間の肉體を、私は他に見る事が出來ない。ふだん見るとばか〳〵しいまでに大きな體軀の持主であるその人も、あの瞬間に於てのみは、少しも大きいといふ感じを與へない。縮まれるだけ縮まつてゐる肉體のあらゆる部分に力が充實

緊縮

して、すべての筋肉が緊縮されるだけ緊縮してゐる。恐らくあの瞬間に於ては、強弓の矢と雖も彼等の肉體は彈き返すであらう。石を投げつけても傷つかないであらう。

だからこそ相撲を見るに巧者な人は、あの瞬間に於て既に勝負を見定める事が出來るといふ事である。試に互に睨み合つた瞬間に於ける力士の體軀と、「待つた。」と叫んで手を引き立上つた瞬間の力士の體軀とを注意して比べて見給へ。その間に何といふ驚くべき相違の存する事であらう。

内部に籠められた力に於て勝る時、人は往々にして鬪はずに勝ち、鬪はずに他を服せしめる事が出來る。西行法師を打たうとして、荒行者文覺(一)が西行法師の姿を見ただけで、その尊嚴に打たれて平伏したといふ昔の話もある。徒に外部へ〳〵と現れ出る諸の力よりも、内に籠つて「信」となつた靈の力のいかに偉大であるかに就い

(一)鎌倉時代初期の豪僧。俗名遠藤盛遠。正治元年(一八九九年)佐渡に流されたが後召還され、更に元久二年(一八六五年)鎭西に流された。歿年不詳。

ての實話は、昔から數多くある。私たちは其所にも「よく縮むもの」の彈力の強さを認め得るのである。

しかし、今日の社會を見わたす時、私たちは餘りに多くの人々が徒に外部への力の濫費をしつゝあるのを見る。かの石川啄木の歌の樣に、まだ咲くだけの力の充實に達しない花のつぼみを、火にあぶつてまでも咲かさうとしてゐる樣な焦燥に、餘り多くの人々が煩はされ過ぎてゐる。安價な力の表現のいかに多過ぎる事よ。

この意味に於て、私たちは現代の社會に向つて、經濟上の緊縮以上に、肉體上の、また精神上の力の緊縮の必要な事を感ずる。よく縮むものゝ强き彈力、――それが今の社會には甚だ乏しい。相撲で言ふならば、睨合が十分でない。ろくに睨み合はないうちに、いゝ加減に相撲をとつてゐる樣な人が餘りに多い。力を外へ働かす事にばかり焦燥してゐて、內に力を充實させる事を忘れてゐる。根强い働がなく、奥深い思考がない所以である。つまり、底力のある人や、底力のある働に乏しいのである。

底力のあるといふ事は、內奥に力の籠められてゐるといふ事である。眞の緊縮と充實とがあるといふ事である。

私たちはよく子どもの頃、腕を絲で縛つて、その絲が力瘤を入れる事によつて切れるか切れないかを試したものである。內に充ちる力の外に現れる力よりも强い事は、こんな事によつてもよくわかる。

「縮むものに彈力あり。」といふ一語は、現代人、殊に現代の若い人々に取つては、最も意義ある金言であると思ふ。緊縮しきつた、力の充實しきつた筋肉は、强い矢をすらも彈き返す。よく縮む事によつてよき充實を得た所にこそ、自らなる眞活動が始るのである。

二三 建國讃歌

西條八十[一]

(一)詩人。早稲田大學助教授。東京市の人。明治二十五年生。

きよし、きよし、日の本。
そは蒼海の潮のしづく
天の瓊矛より滴り落ち、
こゞりて成りし國土なれば。

をゝし、をゝし、日の本。
そは開闢の闇のそこひに、
俠勇魔妖を斬るの巨人
素戔嗚尊を出したる國土なれば。

たふとし、たふとし、日の本。

そは五瀬、稲氷、御毛沼の命、
畏くも神武の帝の御はらからの

神武天皇の東征（高橋廣湖筆）

悲しき御血もてあがなはれし國土なれば。

うるはし、うるはし、日の本。
そは神武の帝をはじめ、
神の御裔なる代々のすめらぎの、

愛もてとこしなへに統べたまふ國土なれば。

建國はいにしへならじ。
建國はけふにつゞけり。
いざわれら若けれども、
大君のみこと畏み、
その御業扶けまつらん。

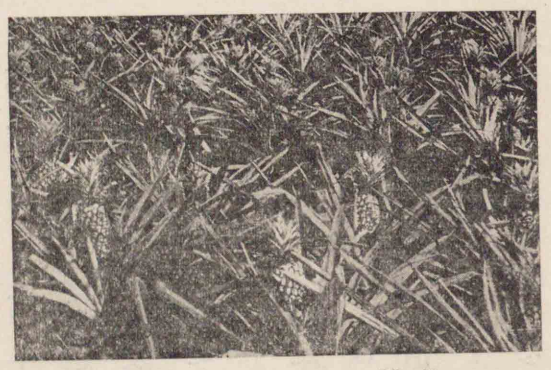
自修文

臺灣より

內地今冬は寒氣殊の外嚴しき由、十分健康に注意し勉學致さる
る樣、切望に不堪候。父もこの臺北(一)に移り住みてより已に一年を
經、風土にも馴れ、何不自由なく暮し居り候間、安心なされ度候。先
日送り屆け候生(なま)のパイン(二)アップル、頗る氣に入り候由、嬉しく存じ
候。在來種は餘り美味にては無之候へども、近來外國種を栽培し、

(一)臺灣本島第一の大都會。臺北州の西北部にある。政治、經濟、學術の中樞地。
(二)pineapple.（鳳梨）

改良を加へ居り候へば、やがて一層美味なる物出づる樣相成候
事と存じ候。まだ〳〵パパイア(一)など珍味なる物多々有之、漸次送
り可申、樂しみに御待ちなさるべく候。臺
灣は果物に惠まれ、バナナ(二)は臺北には出
來ず候へども、南方にはその畑うち續き、
また普通の民家にも生(な)り、その美味なる
事、到底內地にて味はふ比にては無之候。
とかく內地人には、臺灣を瘴雨蠻煙の地、
暑氣もまたなか〳〵堪難き所の樣考へ
居り候者有之候へども、そは領臺當時の
事にて、今は衞生の設備も整ひ、チフス(三)、マ
ラリヤ(四)の病源の如き、未だ絕滅には至ら
ざるも、少し注意さへすれば、これに罹る心配も無之候。夏季溫度
の高さもさ程の事はなく、平均九十四五度と申し候。唯五月より


臺灣バイン アップルの園

(一)papaya. 熱帶アメリカの原產、果實は外觀、味共に甜瓜に似る。
(二)banana.
瘴雨蠻煙　氣候の惡い未開の土地。
(三)typhus.（窒扶斯）
(四)malaria.

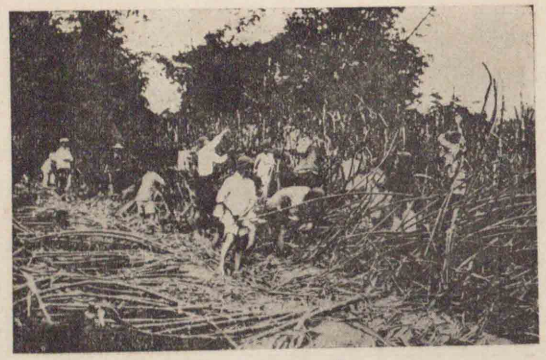
(一)臺灣の門戸を爲す港市。臺北市の東北二八キロメートル。
(二)昭和五年。
(三)高雄州西南部の港市。
常夏の國　年中夏である國。

十月までは夏服にて、夏の長きに苦しめられ候。臺灣の氣候は一概には盡し難く、北部は濕氣多く、(一)基隆市の如き、雨量の多き事世界第二とかにて、(二)昨年一年を通じて晴天僅かに二十四日に過ぎず、中、南部は乾燥して晴天うち續き、夏は概して毎日驟雨あり、さすがの炎熱をも一掃致し、椰子の木蔭の涼風など、またなきものに候。正月六日父が南部の高雄市(三)に赴き候をりなど、溫度九十六度、あはせのみなりし旅に、俄に旅宿の浴衣を借り、團扇を離さゞりし程に御座候。全島を通じて、山地を除く外、全く紅葉を見ず、冬季も寒林枯木、滿目蕭條といふ景觀無之、內地に住馴れたる身には、何となくもの足らず感ぜられ候。臺灣は世に常夏(とこなつ)の國と稱せられ候へども、四時

臺灣の水牛

見はるかす　廣く見渡す。遠く見やる。
(一)臺中州の北部にある。我が國第二の高峰。今上陛下の御命名。海拔三九三一メートル。
(二)臺中州の南部にある。我が國第一の高峰。明治天皇の御命名。海拔三九五〇メートル。

深綠に惠まれ居り候のみならず、百花爛漫たるより言へば、寧ろ常春の國とも稱し得べきかとも考へられ候。


甘蔗の伐採

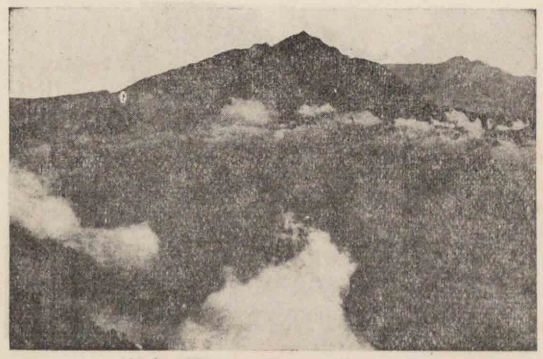
中、南部には水田多く、見渡す限り沃野千里とも申し度、米は二毛(にもう)作(さく)の事とてその生產高頗る多く、この一事を以てしても、臺灣が古來寶の島と稱せられたるも宜なる哉と感ぜられ候。殊に近來は到る所に大規模の水利を開き、勤勉なる本島人が得意の水牛を追ひつゝ、孜々(しし)耕作するを見受け申し候。例の甘蔗(かんしや)の畑、これまた水田に次いで多く、此所彼所の製糖工場より立昇る濛々たる黑煙は、誠に賑々し く、見はるかす山嶺も、內地のよりは稍嶮峻の容(かたち)にて、(一)次高、(二)新高の高峰巍々として雲表に聳え、動かぬ賴もしさを感ぜしめ候。

(一)臺南州の西南部にある。臺灣第二の商業市。

(二)臺南城内の西南部にある。官幣中社。祭神は能久親王。社殿は背後の遺跡所にあり、御殿は下御中の寢臺、擔架等の遺物を保存してある。

(三)伏見宮邦家親王の第九子。北白川宮智成親王の嗣となられた。輪王寺宮慈性法親王の附弟となり、後復飾してプロシヤに留學し、軍事を研究し、歸朝後職に就き、二十七八年近衛師團長として臺灣征討に從ひ給ひ、遂に二十八年十二月臺南で薨ぜられ、御年四十九。

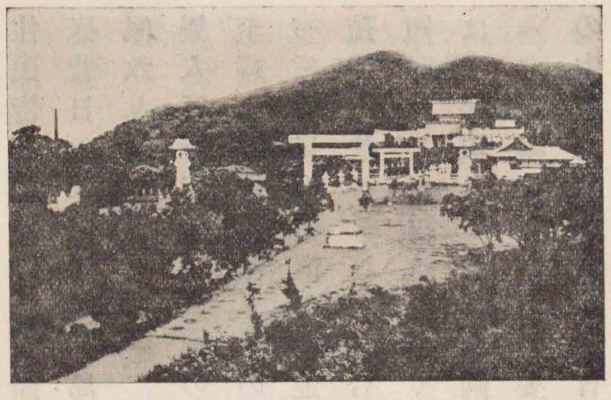
(一)臺南市にて(二)臺南神社に詣で、(三)故北白川宮能久親王の御遺跡を拜觀したる時は、自ら瞼の熱きを覺え候。親王が御重患の御身を以て、近衛師團を率ゐてこの地まで御進軍ありし、遂に薨去あそばされ候は、既に承知の事と存じ候。今ありしまゝに保存せられ居り候御臨終の御室は、屋根低く、窓狹く、一民家の離室に似て、當時御使用あそばされし臥床の傍の壁に、ありしまゝに粗末なる支那畫の掛りをる樣など、殊に畏さを覺えしめ申し候。御軍服、御軍刀などは別の室に陳列しあり、聞及びをる當時を追懷して感慨無量、暫くは立去り難く候ひき。



新高山

臺北融々仁政成。
皇軍到處湧歡聲。

(二)侯爵伊達宗德の第二女。故能久親王の妃殿下。文久二年(一八六二年)生。



官幣大社臺灣神社

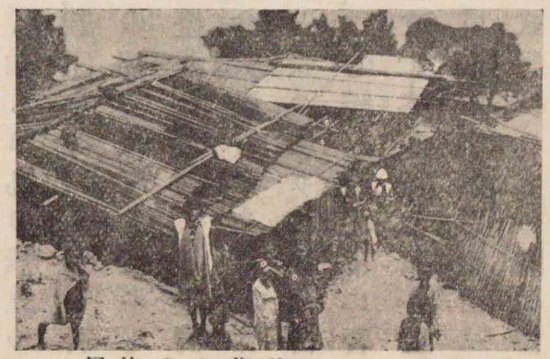
旭光將被臺南地。
殲彼巨魁安萬生。
宮の御作を微吟すれば、榕樹の梢遽に雨の音して、名も知らぬ鳥の飛立つ影、あはれ深く候。親王をお祭りせる神社は全島到る所の都市に有之候へども、その御本座は臺北の官幣大社臺灣神社にて、大國魂命、大己貴命、少彦名命と親王とを祭神と崇め居り候。その御社へは、昨年渡臺致し候際、臺北市に著くや直ちに參拜致し候。臺北より一里弱北の方、圓山といふ地を卜し、明治三十四年十月鎭坐式行はれ、その際には富子大妃にも御渡臺、親しく御拜ありたる由。今神社に妃の御詠この島のあらん限りは輝かん

(一)臺灣を高砂ともいふ。

名も高砂(一)の神のみいつは。

を寶藏致し居り候。誠に領有三十年後の臺灣は、皇化四方に洽く、住民皆堵に安んじ、交通の便、生業の隆、到底昔日の比に無之、全島民擧つて謳歌感佩致し居る有樣に候。

異人種在住の植民地の統治は、至難中の至難、臺灣の統治もその例に漏れず候。先づ言語、風俗、習慣の相違は、とかく意思の疏通を缺き、これが融合調和は、なか〳〵短日月にては成り難く、現に本島人兒童は公學校にて教育し、國語を教へ居り候へども、卒業後には必要なき爲忘れがちの由。今は講習會、練習會などの手段にて、大いに國語の普及に努め居り候。本島人の人口四百萬に近く、これに對し內地人二十萬



臺灣タバホ社蕃人の住居

(一)昭和五年十月二十七日。

(二)花蓮港廳の主邑。臺東平野北方の門戸。

(三)臺東廳の主邑。臺東平野の中心地。

とは、聊か心細き感有之候。

最近(一)霧社事件にて一層有名になりたる蕃人は、平地に約五萬人、山地に約八萬人居住せる由。その種族は七種ありて、タイヤル、サイセット、ブヌン、ツオウ、パイワン、アミ、ヤミと申し、各族によりて言語習慣等を異にし、或は溫良、或は强暴、文化の程度も著しく低く、その統治は容易ならざるものゝ如く候へども、近來學者が各方面よりする研究は、著々その歩を進めつゝある有樣なれば、何れは理蕃の功の完全に擧げらるゝ事と存じ候。

臺灣は中央山脈を境として、西部、東部それ〴〵著しき相違ある由に候へども、東部卽ち基隆より花蓮港(二)に至る有名なる斷崖、花蓮港より臺東(三)に至る沿岸の風物は、未だ見聞致さず、これ等は何れ後日改めて通信可致候。草々。

(一)江戸時代の國學者。京都の人。文政六年(一八二三年)歿、年五十六。

ト居す

ふくつけし

至り

二四　ものゝ上手

富士谷御杖(一)

大雅堂と言ひし人、近頃書畫をもて鳴れり。若かりし時三絃を好める餘り、その頃妙手なりし安永檢校といふ瞽の近隣にわざとト居して、日々に人々に敎ふるを聽きて、心をやられき。或時安永が家に至りて、かく殊更にト居したる由を告げて、一曲を望みぬ。安永その志の懇なるに感じて、やがて傍にありし三絃をさぐりて、彈きて聽かせぬ。

然るにその三絃裏皮破れたりければ、「いとふくつけけれど、おのれ一期の思出に、皮全きにて今一曲を。」と乞ひけるに、安永快からぬ面持して、「そこは何を業とし給ふぞ。」と問ふ。大雅答へて、「繪をかきはべり。」と言ふ。安永の言へらく、「さは、そこは繪は拙かるべし。」と言ふ。大雅思へらく、「一道に達しぬれば、萬づの至りも深き習なれど、これは

なまかたはら痛し

しるし(撥)

懺悔

瞽なるを、いかでか繪の事は知るべき。」となまかたはら痛けれど、「いかなればおのれ繪の拙きを知り給ふぞ。」と言ふに、安永笑ひて、「今裏皮破れたる三絃にて彈きたるを飽かず思す。その聽きざまにて、繪の拙きはしるきなり。すべて三絃は右にばちを持てれば、右手にて彈く事言ふもさらなれど、左手に精神なくては、妙所には到るべからず。今我が左手の精神、そこの耳に入らぬをもて推すに、繪の事もまた筆は右手に持ちて書く事は言ふもさらなれど、恐らくは左手に精神あらじと思ふが故なり。」と言ひき。

大雅いといたく感服懺悔して、深く恩を謝し、歸りて後、繪に深く心や入れたりけん、遂に世に鳴るばかり一家を興されたりき。これ偏に安永檢校が恩にて、檢校はやがて我が繪の師なり。」と、常に自ら言はれきと、大雅にうるはしかりし本間某これを語られき。はかなき業と雖も、至りを極めたる時は、人の耳目の及ばぬ所にすら精神

は滿ちたり。この物語、もはら我が御國ぶりの要を得たり。もの言はんにも、うちふるまはんにも、文書かんにも、歌詠まんにも、耳目の及ぶ限りと心得なば、かの安永檢校に笑はれんかし。――北邊隨筆――

二五　鶯

永井荷風(一)

庭を隔てた隣家でも、今朝は晩く起きたものと見えて、突然九時頃になつて障子をばたゝ〳〵はたき始めたが、それは不思議な程、何時も聞くはたきの音とは違つて、いかにも輕く愉快である。冬の曇つた夕暮近く、外には木枯の風と共に、豆腐屋の呼聲のさまよふ時分、薄暗い部屋から隣の家のはたきの音を聞くと、私は先づ生活の奴隷になつた借家の主人、ヒステリー(二)の妻、リューマチス(三)の老母の顏を描き出すのであつたが、何といふ相違であらう、今聞く春の朝のはたきの音は、いかに懷疑的な私にでも、繫累のない樂しい家庭の

(一)小說家。名は壯吉。東京市の人。明治十二年生。
(二)hysteria.
(三)rheumatism.
懷疑的
繫累

新しい簞笥の色、曇らぬ化粧鏡の輝きを想ひ起さしめる。門外の往來を通る重い荷車の響が、穩かに遠くなつた時、私は軒先にさへづる雀の聲の殊更に高く聞える中に、ふいと一聲細い口笛の樣な、いかにも角のない滑かな響を耳にした。

鶯である。幾年間全く忘れてゐた鶯である。私はあれ程起きにくかつた寢床から、寢衣のまゝに障子をあけて、緣側に出た。想像した通り、明るい日光は緣外一面に輝いてゐて、手水鉢の水と、南天の黑い葉の面とに映ずるその色は、氣のせゐばかりではない、事實どこかに言はれぬ黃金の光澤を含んでゐたが、しかし、私の聞かうと希つた鶯の聲は、一度と絕えたきり、いくら待つてゐてももう聞えなかつた。

私は單に鶯の聲を聞き得ぬばかりでない。暫くしては美しい日の光をも見ぬ樣になつた。あれ程に晴れてゐた空は、私が午飯を食

べてゐるうちに、すつかり曇つてしまつて、庭の樹木や障子を搖る風と共に、昨日の冬が再び舞戻つて來た。四時過にはもう燈をつけねばならぬ程、その日は早く暮れてしまつて、翌日も、またその翌日も、私は二度とあの朝の樣な心地よい朝寢の床の暖さを覺えず、美しい日の光にも出遇はなかつたので、あれこそ全く不順な氣まぐれの氣候であつたのだらうと、それなりに鶯を聞いた一時の喜をも、忘れるともなく忘れてしまつた。

寒い午過、雨の夕方、風の夜と日數は經つて、二月も忽ち末近くなる。私は殆ど毎夜の樣に燈の下に聞馴れた寂しい雨垂のひと夜、外國の友だちに長い返書を認めるのに案外の時間がかゝつて、二時近く寢床にはいつた事があつたが、その翌朝は何時かの樣に再び遲く目を覺すと、今度は屏風を漏れる日の光の明るさはなかつたけれど、私は二聲三聲も續け樣に鶯の鳴いてゐるのを聞いた。

すぐさま起出て、顏を洗ふ爲に縁側に出て見た時、私が何より先に感じたのは、日頃の長雨にしつとりぬらされた庭面の土の色である。この前始めて鶯を聞いた朝には、日光ばかりが春らしく輝いてゐたけれども、庭の地面は、冬中の霜で見る影もなく燒けたゞれ、ひゞのきれた樣に割れてゐる所さへあつた。それが今では幾夜の雨を十分に吸ひこんで、恰もくはで耕した樣に柔かく平かに落著いて若しその上を歩いたら、人の足をも埋めさうに思はれる。雀が幾羽となく飛びおりて、頻りと何かを啄んでゐるので、私は人の眼には見えない樣々な草の芽や蟲の卵が、どれ程

早春（横山大觀筆）

放縱

多く濕つたこの土地の中に發生してゐるかを想像した。

萬物の母なる土地その物が、かくの如く穩かに休んでゐるので、その上に生息してゐる樹木は、何れも冬籠の寒氣に對する反抗的な態度を改め、もう暴風に吹倒される心配もなく、易々その枝を伸した樣に思はれた。そのうちにも殊に優しく私の眼に映じたのは、庭の中央に立つてゐる大きな楓の木であつた。

鼠色した皮の上には、白い斑點のある太い幹が、びつしよりぬれたまゝ乾かず、鼈甲の樣な光澤を生じて、右に左に、地上に匐ふ樣に長い枝を伸してゐたが、そのいかにも自由な放縱な曲線の美しさは、何とも言へなかつた。

楓の根元には、去年野菊や薄を刈りこんだ切株が、絹絲で縫取でもした樣に際立つて、黑い土の上に綠の若芽を出してゐる。椿の固い厚い葉は、陶器の表面の樣に輝いてゐる。――梅の木は針の樣に

尖つた枝の先に、その色も、その大きさも、ちやうど赤小豆の粒程のつぼみをつけてゐる。――子細に、私は目の屆く限り、朝の雨に化粧した庭の樹木を見廻してゐると、空は曇つたまゝ薄暗いのに、何所から漏れてくるとも知れぬ薄い日の光が、ぽつと流れわたつた。冬であるならば、こんな薄い日の光では、大きな家屋の影さへ描かれまいのに、庭中の樹木は、すぐさまその細い絲の樣な小枝の影までを、はつきり餘す所なく、ぬれて平かな土の上に横たへた。

見てゐるうちに、日の光が次第に強く明るくなるに連れて、ぬれた土地は薪木か何かで底の奥から燃される樣に、陽炎をちらつかせて乾き始める。私は珍しいこの現象に愈興味を覺え、食事もせずに緣側に腰をおろして、卷煙草に火をつけようとした。すると、マッチは幾度擦つても、どこから流れてくるとも知れぬ風の爲に、煙草に火のつく間を待たず吹消されてしまふ。私は首を擧げていぶかし

げに庭を見たが、細い楓の枝は少しも動かず、何れの樹木も一齊に朝寢の自分と同じ樣、いかにも大儀らしく靜止してゐるのである。漸くにして、非常に高いかしの梢に常磐木の細い葉が、日の光にちらちら動搖し居るのを認めたばかり。私は掌（てのひら）をかざしてもう一度マッチを擦つて見ると、小さな焰は掌の蔭ながらに、やはり激しく動搖するので、私は始めて、今朝の空氣全體が、風と名づけられて枝を動かす程に强くはないけれども、いかにも廣く、大きく、緩やかに動いてゐるのだと氣附いた。

あゝ、すべての物がこんなに軟かく、こんなに優しく見えるのは、眼にも見えず、物をも動かさず、愼深い人の息の樣に通ふこの風の力であらう。私は暖室法の不完全な日本の家の冬中、火鉢のそばに身を堅く折敷いてゐた兩足をば、今日始めて長々と緣側から沓脫石の上に踏伸し、それと同時に、いかなる時も深く懷中にさしこんでゐた片手をば後について、身を支へさせた。

鶯は私の目の前の楓の木に止つて、長い尾を敏活に振りながら、今は聲も惜しまずに鳴きつゞける。雀は庭中の枝にさへづり、雞はどこか近くの家で頻りに時をつくつてゐる。植込を隔てた勝手の井戸端では、高話しながら女中どもの笑ふ聲が、いかにもたわいなく聞えると同時に、出入の商人があける裏門の鈴の音、往來を通る物賣の笛、どこかではやす遠い太鼓の響までがみんな一緒になつて、空模樣の次第に晴れ、日の明るくなるに連れて、冬には聞かれぬ澄んだ强い響で、私の耳に傳はつてくるのであつた。けれども、私は不思議な程それ等雜多の物音——鳥の歌、人の聲、場末の街の物音をば、不調和に感じなかつた。ちやうど廣大な音樂堂で管絃樂が演奏される前、幾多の伶人が幾多の異なつた樂器の調子をば、各自勝手に調べてゐる時、その不調和な響が、演奏を待つてゐる聽衆の心

伶人

には、時として演奏される曲よりも、却つて深い空想をさそふ。――それと同じ様な心持がするのであつた。

春はもう再び私を欺かなかつた。このたびこそ冬は全く退却してしまつた。午前の晴れた天氣は、大概午過から風若しくは雨になり、さらずば今にも降るかと思ふ様に、重く曇つたまゝ暮れてしまつて、翌日の朝には、嚴冬にも見られぬ程な霜柱が庭一面に立つ事も一二度あつた。また或時は雪や霰の降つてくる事もあつたし、日の光は終日麗しく輝いてゐながら、吹く風が氷の様に冷く、手先や頰を凍らせる事もあつたが、また時としては全く反對に、夕方から夜にかけて、とても羽織を脱がずにはゐられぬ程蒸暑くなつて、室の窓を明けて見ると、隣家の書生が弄ぶ銀笛の響が、溫泉場へでも行つた様な夏らしい心持をさせる事がある。さういふ晩にはとかく地震が起つて、翌日は雨になりたがる。……斯様に氣候が極めて

不順であるだけ、人の心には季節全體の變遷といふ事が、動かし難く感じられて來て、「春」といふ言葉が大きく空に書いてあると、現代の或口語詩人が歌つた様な心持が、日にまし深く明らかになつて行くのであつた。

庭の梅はしかし三月になつてもまだ開かない。――荷風傑作集――

二六　那須の與一の事

さる程に阿波、讃岐に、平家に背いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、此所の洞より、十四五騎、二十騎うち連れ〳〵馳せくる程に、(一)判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段許にもなりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見る所に、舟の中より年の齢十八九許

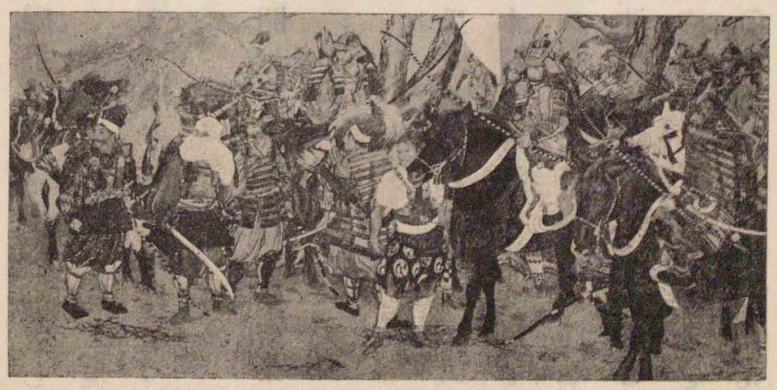
(一)源義經。
尋常に飾る

柳の五つぎぬ
舟のせがい

なる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挾み立て、陸へ向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衞實基を召して、「あれはいかに。」と宣へば、「射よとにこそ候らめ。但し大將軍の矢面に進んで、けいせいを御覽ぜられん所を、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」と申しければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、「てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきい

矢面
てだれ
小兵

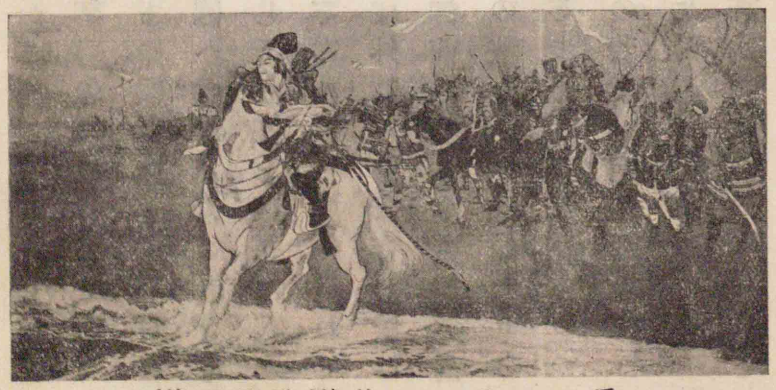


扇の的（尾形月三筆）

さん候
きりふの矢

て候。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

與一その頃は、未だ二十許の男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂に、もよぎをどしの鎧著て、あしじろの太刀をはき、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せてはいだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。重籐の弓脇に挾み、冑をば脱いで高紐に掛け、判官の御前に畏まる。判官「いかに與一、あの扇の眞中射て、かた



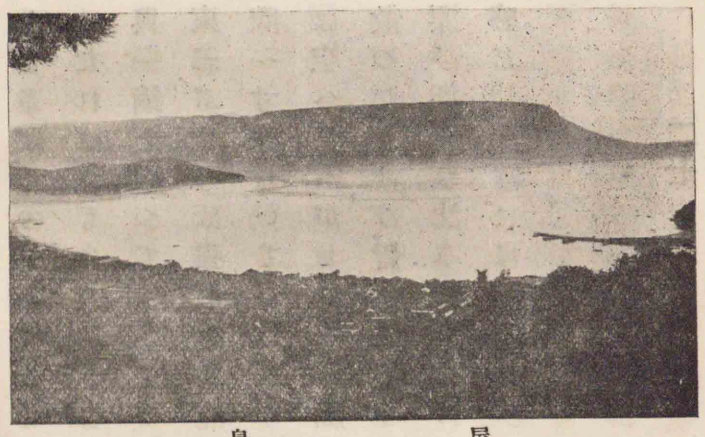
扇の的（尾形月三筆）

一定
御諚
矢ごろ

きに見物せさせよかし。」と宣へば、與一「つかまつるとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも子細を存ぜん人々は、これより疾う〳〵鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はば外れんをば存じ候はず。御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷り立ち、黑き馬の太う逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乘つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方のつはものども、與一が後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

矢ごろ少し遠かりければ、海の中一段許うち入つたりけれども、

(一)寿永四年。(一八四五年)
くしに定まらず
くつばみ
神明


屋島

尙扇のあはひは七段許もあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許の事なるに、をりふし北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげ、ゆりする。漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れも何れも、はれならずといふ事なし。與一目をふさいで、「南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓切折

り自害して、人に再び面を向ふべからず。今一度本國へ歸さんと思し召さば、この矢はづさせ給ふな。」と、心のうちに祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一鏑を取つて番ひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長なりして、あやまたず扇の要際一寸許おいて、ひいふつとぞ射きつたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一もみ二もみもまれて、海にさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出いたるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家ふなばたをたゝいて感じたり。陸には源氏えびらをたゝいてどよめきたり。

—平家物語—

よつぴいてひやうと放つ十二束三ぶせ

（箙）

二七　仁は心のいのち

室鳩巣[一]

（一）徳川幕府の儒官。名は直清。江戸の人。享保十九年（一七三四年）歿、年七十七。

齒德遜讓

心に仁あるは、人に元氣あるが如し。人の元氣は脈に現れ、心の元氣は愛に現る。脈の通ひ絶ゆれば人死する如く、愛の理滅ぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。それ心は活物なるにより、人に情あり、ものゝあはれを知りて、常に活きたるものぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長を見ては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事を知り、不義を聞いては必ず恥づる事を知る。若し情なくあはれを知らずば、その心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さも知らずなりなん。何をもて自愛し、何をもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても恥づる事なかるべし。是をもて言ふに、仁義禮智何れも心の德にして、各その理わかるれども、その本源は仁に外ならず。人として不仁ならば、義も、禮も、智もその樣ありその用ありといへど、所詮内よ

り生ぜねば、眞の德にあらず、公の理にあらず。この故に仁に心の德と言ひて、外に德を言はず、仁に愛の理と言ひて、外に理を言はず。その言はざる所に深き意ありと知るべし。

天德寺平語を聽く（小堀鞆音筆）

それにつきて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天德(一)寺、豪健の勇將なりしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聽きけるに、未だ語らぬ先に琵琶法師に言ひけるは、「某は唯あはれなる事を聽きたくこそあれ。その心得して語り候へ。」と言へば、法師「心得候。」とて、佐々木四郎高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天德寺あはれがりて、雨しづくと泣きけり。さて「今一曲前の如くあはれなる事を

(一) 豐臣時代の武將佐野了伯。慶長六年（一二六一年）歿、年四十四。

雨しづくと泣く

聽きたし。」と言へば、那須與一宗高が扇の的を語りけるに、平家半ばより、天德寺また落涙數行に及べり。後日に家臣の輩に、「過ぎし日の平家はいかゞ聽きつる。」と言ふに、家臣ども「最も面白き事にて候。但し我等ども一つ心得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに勇烈なる事にて、あはれなる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばれて候。これはいかゞの事にて候にや、今に不審なる事に何れも申し合ひ候。」と言へば、天德寺驚きて、「只今までは各を賴もしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さて〳〵力を落して候。先づ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。賴朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生唼を高綱に賜はるにあらずや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじと、賴朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。あはれならぬ事かは。」とて、しば〳〵涙を拭ひつゝ、暫しあり

武邊

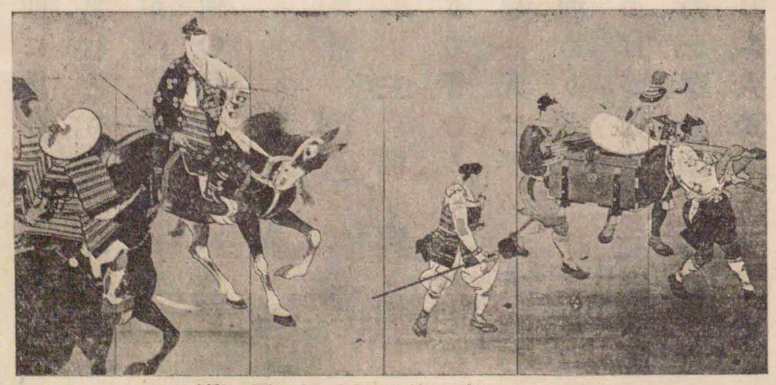
て言ひけるは、「また那須與一も大勢の中より選ばれて、唯一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘入れて的に向ふに至るまで、源平兩家鳴りを靜めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名をれたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道程あはれなるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家を聽く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各にはあはれになかりしと申さるるにつけて思ふに、各の武邊は唯一旦の

生　嗟（伊東紅雲筆）

迷惑す

勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにては賴もしからずこそ候へ。」と言ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。

これ天德寺が武邊は涙より出づれば、固より仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手荒き道なれば、言はゞ仁とは黑白のたがひある樣なれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況やその餘の事は、尙もて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、內より油然として潤ひわたりて發するに



生　嗟（伊東紅雲筆）

あらざれば、眞のものにあらず。これ卽ち前に言ひし人に情あり、ものゝあはれを知るの心なり。すべて諸の言行ともに、義理に當りては悉く忍びざるの心より出でて、天德寺が涙こぼす樣にだにあらば、これ心德の全きなり。仁者と言はんに何の疑かあるべき。

——駿臺雜話——

(一)江戸時代の儒者。名は晉。豐後の人。寛政元年(一七八九)歿、年六十七。

毀譽
訟事

二八　毀譽

三浦梅園(一)

毀譽は人の大節なり。然りと雖も世擧りて譽むるにも必ず察すべし。人擧りて毀るにも必ず察すべし。況や一人は譽め、一人は毀る事に於てをや。例へば、訟事あらんに、兩方理ありと思へばこそ互にいひ募りてやまざるなれ。これを奉行のさばかんに、とにかく一人は勝ち、一人は負くべし。勝ちたる人は奉行を譽め、負けたる人は毀るなり。また惡しき人なりとも、それに伴なふ人はこれを善しと思へばこそ交るなれ。我が善しと思ふをば譽め、我が惡しと思ふをば毀る習なれば、その毀譽によりてその人の善惡も分ち難し。同じ一盃の酒ながら、上戸は醉ひて面白き物なりと言ひ、下戸は醉ひて苦しき物なりと言ふ。まして人傳などに聞く人の善惡のさたは、おぼつかなき事なり。

三浦梅園

昔、人ありて、その子を或寺へ遣し置きけるに、暫くありて逃歸り、住持の事を毀りけるは、我に月代剃れと言ひければ、例の如く剃りけるを、剃り樣のわきて惡しとていたく叱りぬ。また或時、我がかはやに行きけるを見て、何とてかはやへは行きし。不屈なり。向後かはやへ行くべからずと言ひ、その後、朝飯たくとて味噌をすりけるに、これも味噌をするが惡しきとて叱りぬ。

(則)

理不盡

(一)長野縣伊那郡小野川の谷で、古驛路にあたつてゐた。

すべて理不盡の次第、殆ど困却に及びたり。」と語りけるを親聞きて、「さりとは出家にも似合はざる事なり。」とて、急ぎ山に登り、右の事どもを詰りけるに、住持聞きて、「いや〳〵、さ樣の事にてはなし。常々髮よく剃る故に、この頃剃らせけるに、いたく眠りて、これを見給へ、斯樣に頭へ切りこみ候。」とて疵を見せ、「その上、かはやも行くべきかはやへは行かで、客の爲に設けたる方へ行き、味噌も常の味噌をさしおき、客に使ふべきを使ひし故、これ等の事を返す〳〵も戒め諭しつれ。」と言ひけるにぞ、親も理に服して、却つて罪を謝しけるとぞ。

信濃の國薗原(一)といふ所に木あり。遠くより見れば箒の形の如し。よりてこれを箒木といふ。されど近づきて見れば、箒に似たる所もなく、うち繁れりとかや。遠きより見聞くと親しく見聞くとは、多くはこの箒木の類なるべし。凡そ人のものを批判するも、我が好む所を譽むるものなり。俳士に歌人の評判せさせ、日蓮宗に眞宗の評判

(一)父の復讐をいふ。禮記の「父讎弗ニ與共戴一レ天」の語に基づいてゐる。

宸襟

(二)時信の子。一旦西海に走り、平家滅亡後再び上洛したが、後また佐渡に流された。文治五年(一八九)四年佐渡に歿した、年六十。

せさせんに、いかでか公論あらん。同じ道を二人して行かんに、一人はすこやかにしてこの道近しと言ひ、一人は疲れて遠しと言はん。これ道に違あるにあらず、心に違あればなり。例へば、義經の事を論じて、義經を善しと思ふ人の言はんには、「この人誠に幼より常人にてはおはしまさざりけり。共(一)に天を戴かざる讎を報ぜんと、夜々寺を出でて太刀打を學び、遙かに秀衡が人となりを見てこれにより、遂に飛ぶ鳥も落ちんばかりなる勢の平家を二三年のうちに攻滅して、亡父の恥辱を雪ぎ、法皇の宸襟を安め奉り、絶えたる源氏を興し、兄賴朝を天下の武將と仰がしめたり。」と言ひ、また義經に不滿なる人は、「なる程、この人戰爭に一通り自由を得たる人ながら、恣に平時忠の女を納れ、梶原景時とせんなき口論をしたる、大將たらん人のしわざに似ず。然るを都に逃げのぼり、賴朝追討の院旨を申し受け、吉野山にて一人の靜に別れかね、兒女子の涙をしぼられし。」など

と言ふ。かく善しと思ふ人の論と、悪しと思ふ人の論とは、誠に雪と墨との差あるなり。その悪しき所を捨てて善き所を取る、これ人を用ふる道なり。その悪しきをば悪しとし、善きをば善しとす、これ公の論なり。また分相應につきて言ふ事あり。鼠を甚だ大なりと言ふとも、牛の小さきには及ばじ。蛇を甚だ短しと言ふとも、みゝずよりは長かるべし。故に人を善しと言ひて譽むるも、悪しと言ひて毀るも、その場合を考ふべき事なり。

——梅園叢書——

國文　卷六終

國文奥附

昭和六年二月十八日印刷
昭和六年二月二十二日發行
昭和六年十月九日訂正再版印刷
昭和六年十月十二日訂正再版發行

著者　冨山房編輯部

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社冨山房

代表者　同所合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬

印刷所　東京市小石川區音羽町七丁目六番地　冨山房印刷部

定價　自卷一至卷八　各金六拾錢　卷九・十　各金五拾九錢

發行所　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社冨山房
電話神田二二七一——二二七六
振替貯金口座東京五〇一番

版權所有
東京都立図書館蔵